

朝鮮初期昌徳宮後苑小考

桑野 栄治

【欧文表記】 Eiji KUWANO, A Study on the Rear Garden of Changdeok Palace in the Early Joseon Dynasty

【要旨】 本稿は朝鮮初期に時期を限定し、宮中の庭園施設である後苑の管理機構、ならびに離宮昌徳宮の後苑に点在する諸建築物の沿革とその機能について、官撰記録を中心に整理・分析したものである。

上林園は太祖三年に発足した後苑管理機構であり、のちに提調制を導入して世祖一二年に掌苑署と改称されるが、広義には空間としての後苑を指すこともある。一五世紀前半の上林園は祈雨祭・祈祷など祭場として活用され、対馬島主のほか辺境の平安道・済州島から献上された動植物・果物もここで飼育・栽培された。

太宗五年に太宗は離宮として昌徳宮を創建した。昌徳宮後苑の建造物のうち、解愠亭（のち慎独亭）では酒宴、講論、撃毬の観覧のほか、仏教行事が執り行われた。昌徳宮西北にあった文昭殿は太祖とその王妃の肖像を奉安した真殿であるが、のち世宗代に太宗とその王妃の肖像を奉安する広孝殿とともに景福宮東北に移転となる。世祖代には軍事訓練の視察を主たる目的と施設として閲武亭を建造し、弓術を競わせ、また陣法を訓練させた。

世祖八年より昌徳宮では後苑の拡張工事が始まる。世祖は新茅亭で狩りを楽しみ、隠遁生活を送るために無逸殿の建造を始めたが、まもなく工事は中止となり、世祖も死去した。成宗代には採桑壇を築造して中宮が先蚕親祭を執り行い、昌慶宮後苑には環翠亭が建造された。後苑拡張事業は燕山君代に引き継がれるが、外国使節の引見、軍事訓練、政治・学問のサロンといった従来の後苑の機能は持ちあわせていない。燕山君は昌徳宮後苑の東牆・西牆外の民家を撤去させ、宴享・観劇のための舞台装置として千人を収容可能な瑞葱臺を建造した。瑞葱臺は「廃主」の建築として中宗反正後に撤去の命が下るが、のち明宗代には製述試験や曲宴の会場として利用されている。

【キーワード】 朝鮮初期、昌徳宮、後苑、上林園、解愠亭、文昭殿、閲武亭、新茅亭、採桑壇、瑞葱臺

【目次】

はじめに

一 後苑の管理機構

(1) 上林園から掌苑署へ (2) 上林園という空間

二 昌徳宮後苑の造成事業

(1) 解愠亭 (2) 文昭殿と広孝殿 (3) 閔武亭

三 昌徳宮後苑の拡張

(1) 新茅亭と無逸殿 (2) 採桑壇 (3) そして享楽の場合へ
むすび

はじめに

朝鮮初期（ほぼ一五世紀に相当）の王都漢城（いまのソウル）には太祖四年（一三九五）九月に王宮の景福宮が竣工し、漢城還都後の太宗五年（一四〇五）一〇月には離宮として昌徳宮が創建された^①。景福宮と昌徳宮には宮城の北部に古代中国の園林空間を彷彿させる後苑（いわゆる禁苑）が存在した。帝都北京でいえば、宮城の西側に設けられた太液池を取り囲む西苑に相当しよう^②。景福宮後苑については中宗二六年（一五三一）に刊行された官撰地理誌の『新增東国輿地勝覧』巻一、京都上、苑囿条に「景福宮後苑〔序賢亭・翠露亭・閔離殿・忠順堂有り〕」と簡略な記録を残している（史料中の「」内は割註。以下同じ）。ところが、従来の韓国人による通史的都城研究では朝鮮初期の官撰地理誌の記録に注目することはなく、その結果、景福宮後苑に点在したこれらの楼亭・殿閣の具体的な機能に関しては明らかにされていない^③。かつた。

一方、昌徳宮後苑に関しては同じく『新增東国輿地勝覧』巻一、京都上、苑囿条に「昌徳宮後苑〔昌慶宮後苑と通ず。閔武亭有りて、亭の傍らに四井有り。曰く摩尼、曰く玻瓈、曰く瑠璃、曰く玉井と。世祖の時、鑿つ所なり〕」とあり、少なくとも閔武亭の存在をわれわれに知らしめるが、従来の都城研究では閔武亭以外の諸施設も紹介されている^④。ところが子細に検討すると、造宮下命後に工事が中断された建造物の事例、逆に撤去命令が下ったにもかかわらず存続していた事例もあり、問題がないわけではない。壬辰倭乱（文祿・慶長の役）により景福宮と昌徳宮は廃墟となり、朝鮮初期の昌徳宮後苑の様子を伝える絵画資料も現存しない^⑤ことから都城研究を進めるうえで障壁となっている。

筆者は朝鮮初期漢城研究の一環として、景福宮後苑の建築群に関する史料を『朝鮮王朝実録』から抽出し、朝鮮初期における景福宮後苑の空間構造を考察したことがある^⑥。本稿はその続編として後苑の管理機構、および昌徳宮後苑の沿革とその機能について追跡することにした。具体的には朝鮮初期における後苑の管理機構である上林園、ならびに離宮昌徳宮の後苑に点在する諸建築物の沿革とその機能について取りあげることとする。

一 後苑の管理機構

(1) 上林園から掌苑署へ

従来、朝鮮初期の上林園に関する研究が皆無であったわけではない。たとえば朝鮮後期の掌苑署に関しては、一八世紀末頃に成立した『掌苑署臚録』を分析した全潁玉氏による論考があり、正祖一八年（一七九四）当時の漢城と京畿道一帯の果園（京苑と外

苑)を簡潔に整理し、当時は果園が一般的に「東山」と称されたことを指摘した。⁹⁾朝鮮初期に時期を限れば、かつて田川孝三氏が財政史の観点から、

上林園は太祖三年七月、前朝以来の東山色を改めて置いた所謂闕内司の一で、又供上衙門の一であり、宮闕及び京・外苑を管理した。奴婢田結多数を属し、その栽培する所の果実等は薦新・進上及び使客支持の為に供上された。

と触れたことがある。ここにいう「京・外苑園」についても田川氏は「闕内苑園の外、京苑は章山・漢江等に、外苑は開城府・江華府・南陽・果川・楊州・富平におかれた」と解説する。¹⁰⁾田川氏はその史料の根拠を示してはいないが、おそらく成宗二十三年(一四九二)に成立した『大典統録』の規定に基づくものであろう。¹¹⁾

太祖三年(一三九四)七月に朝鮮政府は従前の「東山色」を「上林園」と改め、¹²⁾世宗五年(一四二三)三月には提調二名と副提調一名を置き、政府の高官が下級官庁の長官を兼任するいわゆる提調制が導入された。¹³⁾その後、世祖十二年(一四六六)正月の官制改革の際に太祖(在位一三九二〜九八年)代以来の上林園を「掌苑署」と改称し、¹⁴⁾苑園(後苑)と花果(花草と果物)を管掌する機構として法典に定着することになる。成宗十六年(一四八五)正月に施行された基本法典『経国大典』によれば、

掌苑署〔苑園・花果を掌る。提調一員、別提三員〕。(『経国大典』卷一、吏典、京官職条、正六品衙門)

とあり、掌苑署に配属された官員として「正六品／掌苑一員、別提」「従六品／別提」と定める。別提については、のち朝鮮後期の『大典通編』(正祖九年、一七八五)卷一、吏典、京官職条、

正六品衙門、掌苑署の項、ならびに『大典会通』(高宗二年、一八六五)卷一、吏典、京官職条、従六品衙門、掌苑署の項ではないずれも「原」苑園・花果を掌る「提調一員、別提二員」とするが、おそらく誤刻であろう。『新增東国輿地勝覧』文職公署条も「別提三人」と記録するからである(後掲)。

さらに『経国大典』卷一、吏典、雜職条によれば、掌苑署にはいわば技術官職として「従六品／慎花一員」「従七品／慎果一員」「正八品／慎禽一員」「従八品／副慎禽一員」「正九品／慎獸三員」「従九品／副慎獸三員」の計一〇名が配置されており、彼らが後苑内の花果の栽培や禽獸の飼育を担当したものと考えられる。『経国大典』の条文中にある「苑園」に関しては、のち明宗一〇年(一五五五)に成立した『経国大典註解』に、

苑は禽獸を養う所以なり。牆有らば園と曰う。古、之を園と謂い、漢、之を苑と謂う。(『経国大典註解』上、後集、吏典、六曹条)

と解説を加える。つまり、苑とは禽獸を飼育する施設であつて、垣などの区画施設があればこれを園という。古代中国の都城に附属した庭園施設の語義を、朝鮮王朝が継承していることは一目了然である。

また、官撰地理誌の『新增東国輿地勝覧』は掌苑署について以下のごとく記録する。

掌苑署〔北部鎮長坊に在り。苑園・花果を掌る。○掌苑一人、正六品。別提三人。【新增】燕山丙寅、掌苑を革む。今上初め、復た置く。』(『新增東国輿地勝覧』卷二、京都下、文職公署条)

これにより、官制改革により長官の掌苑が燕山君一二年（一五〇六）にいったん廃止されたのち、「今上」つまり中宗（在位一五〇六～四四年）代のはじめに復活したことが知られる。また、掌苑署の官衙は漢城の北部鎮長坊にあったという。朝鮮後期の英祖（在位一七二四～七六年）代に製作された『都城大地図』によれば、景福宮後苑と「鎮長坊」とのあいだに「掌苑署」と墨書され、純祖三十四年（一八三四）に完成したと推定される金正浩『青邱図』所収の「都城全図」にも、景福宮後苑と「鎮長坊」とのあいだに「掌苑署」の官衙が描かれている。したがって、掌苑署の位置は朝鮮後期まで変わることとはなかったと考えるてよからう。

（2）上林園という空間 ― 一五世紀前半の後苑点描 ―

①明帝の処女要求と上林園

明が元の高麗統治政策を踏襲し、朝鮮に対しても処女（未婚の女性）の進献を要求してきたことは、つとに末松保和氏によって指摘されたとおりである。²⁰「朝鮮女性史上の一大事件」ともいふべきこの問題を実録記事に徴すれば、世宗九年（一四二七）七月には明使による処女要求と上林園に関わる希有な記録がみえる。

三使臣、闕に詣みて辞す。上、勤政殿に迎え入れ、茶礼を行
い訖りて、使臣と上林園に詣み、処女に見ゆ。『世宗実録』

卷三七、九年七月乙巳（一九日）条

世宗（在位一四一八～五〇年）は同王八年一〇月以降、晩年まで景福宮にて生活していた。²¹ここにいう「三使臣」とはこの年四月下旬に来朝した明使昌盛・尹鳳・白彦の一行であり、馬五千匹の進献を要求する宣宗宣德帝の勅書を朝鮮国王世宗のもとにもた

らした。²²約二ヶ月のあいだ朝鮮に滞在した明使一行が任務を終え、帰国する前日に景福宮の勤政殿にて世宗に別れの挨拶を済ませたことを伝える。茶礼とは、朝鮮国王が明使に茶を進めてもてなす宮中儀礼である。²³ついで世宗は明使とともに景福宮後苑の上林園へと向かい、明使が選抜した処女と引きあわせたという。前日に中宮の昭憲王后沈氏（一三九五～一四四六年）は慶会楼にてその処女七人を引見し、親族も招いて饌別の宴を開いていた。²⁴泣き疲れ、上林園で待機していた彼女らはすでに朝鮮を去る覚悟を決めていたと思われる。

その翌日の記録が以下に示す実録記事である。

三使臣、闕に詣む。上、勤政殿庭の幕次に迎え入れ、茶礼を行
う。七処女、上林園より勤政殿に入り、分ちて有屋の轎
子に入る。成氏独り一轎に入り、其の余は則ち二人共に一轎、
使臣親しく鑰を鎖す。執饌婢（「宮中で食事をつくる婢」）及
び従婢（「嫁入りの際に付き従う婢」）は皆な乗馬し、建春門
（「東門」）より発行す。其の父母・親戚、街を闌りて哭送し、
観る者亦た皆な流涕す。『世宗実録』卷三七、九年七月丙午
（二〇日）条

ここには「其の父母・親戚、街を闌りて哭送し、観る者亦た皆な流涕す」とみえるように、明を中心とする東アジア国際秩序に参入した朝鮮の立場と、その後の朝鮮社会におよぼした影響を考えるうえで興味深い。²⁵わずかに二件の記録ではあるが、一五世紀朝鮮の一時期、上林園は明帝への「献上品」を管理する場として利用されていたことになる。

その後、世宗一一年正月には景福宮の思政殿と慶会楼の重修工

事が始まり、世宗は一時的に生活の場を上林園に移したことがある。²⁶⁾ところが、上林園での生活は不便であったためか、世宗は景福宮建春門内にあった東宮へ移り、その東宮に住まう王世子が上林園へ居を移すこととなった。²⁷⁾おそらく、上林園は国王・王族の生活空間としても利用できる施設を構えていたのではないかと推測される。

②祭場としての上林園

実録記事によれば、太宗（在位一四〇〇～一八八一年）は太宗一三年（一四一三）七月に上林園に童男数十人を集め、蜥蜴祈雨祭を行うよう命じたことがある。

檢校漢城尹孔俯に命じて童男数十人を聚め、蜥蜴を以て上林園に祈雨せしむ。三日にして罷む。『太宗実録』巻二六、一

三年七月己卯（二日）条

当時の記録には「三日にして罷む」とあることから、童男数十人は昼夜をわかつた三日間、「トカゲよトカゲよ、雲を興し霧を吐け。いまずぐ雨が溢れば、お前を帰してやろう」と祭文を唱えていたことであろう。²⁸⁾蜥蜴祈雨祭は旱魃に対する施策の一環であり、同日には僧侶と巫女を選抜して各地の山川にて祈雨祭を行うよう、最高議決機関たる議政府に命じている。²⁹⁾果たして三日目には小雨が降ったらしく、上林園にて蜥蜴祈雨祭を行った童男にはそれぞれ正布（麻布）一匹が下賜された。³⁰⁾

一方、世宗代には宗親の治癒祈願に関する記録もみえる。世宗二〇年七月に世宗の兄である孝寧大君（太宗の次男。一三九六～一四八六年）の病状が思わしくなかったことから、世宗は上林園

にて祈祷を命じた。³¹⁾孝寧大君の病は二ヶ月後に回復しており、上林園での祈祷はある程度の効果はあったのであろう。

わずかに二件の事例にすぎないが、上林園はたんなる果樹園ではなく、祈雨祭や祈祷の場としても活用されていたことになる。

③動植物園としての上林園

朝鮮初期には国王の下令によることなく、地方の山海の珍奇な産物が国王のもとへ進上されることがあった。³²⁾こうした特殊な産物は国内にとどまらず、ときには日本からもたらされている。たとえば、太宗六年九月に対馬第七代島主の宗貞茂（？～一四一八年）が使者を朝鮮に派遣して土物を献上した。

対馬島守護宗貞茂、使を遣わして土物を献ず。蘇木・胡椒及び孔雀なり。使者自ら言う、南蕃船を掠めて得る所なりと。司諫院上言す、珍禽・奇獸、国に蓄わざるは古の訓えなり。況んや此の剽劫の物をや。宜しく却けて受くることなかるべし、と。上、絶遠の人を重んじ、命じて孔雀を上林園に蓄わしむ。『太宗実録』巻一二、六年九月壬午（二十六日）条

このとき対馬宗氏は、南蛮船から略奪した蘇木（蘇芳）・胡椒のほかクジャクを献上した。実際、先月には南蛮の爪哇国（ジャワ）からの使節団が全羅道群山島沖で倭寇に襲われ、船中のクジャク・オウム・インコのほか蘇木・胡椒などの薬材が略奪されたとの報告があつたばかりである。³³⁾そのため、司諫院は珍禽・奇獸を飼うべきではないと太宗を諫めたが、太宗は「絶遠の人を重んず」との立場からこれらを受け取り、クジャクは上林園で飼育するよう命じた。³⁴⁾太宗はその後、枝振りのよい梨の木を江原道に求めて

上林園に接ぎ木させ、また済州島へは上林園の官員を派遣して柑橘数百株を全羅道順天など沿海の邑に植えさせるなど、果樹の栽培にも興味を示している³⁶⁾。

これより約四〇年を経た世宗二九年五月のこと、同じく対馬の第八代島主宗貞盛（？～一四五二年）もやはり使者を派遣し、今回は木芙蓉三株と楊梅（ヤマモモ）一株を献上した。例によつて朝鮮国王はこれらの献上品を上林園に植えるよう命じた³⁷⁾。

同じく世宗代には明と国境を接する北方の平安道、そして南方の済州島より一風変わった献上品が王都漢城に届いた。たとえば世宗一〇年三月の実録記事によれば、平安道では黒キツネが捕獲され、献上品として届けられたその黒キツネは上林園にて飼育することとなった³⁸⁾。世宗一七年九月には済州按撫使崔海山（一三八〇～一四四三年）が六つの実が連なつたザクロを進上すると、世宗はこれを上林園に送らせた³⁹⁾。翌年閏六月に同じく崔海山がサルとノロを届けるや、世宗はやはり上林園に飼育を命じている⁴⁰⁾。のちに済州按撫使が献上したサルとノロは漢城の上林園から仁川の牧場（龍流島）へ移されたが、いずれも済州島の風土の特異性を示す事例といえよう。

また、世宗二九年八月の実録記事には都城の整備と関わる記録もみえる。世宗は京畿と忠清道の長官である監司（觀察使）に次のごとく王命を下した。

京畿・忠清道監司に示す。都城四山の松木、蟲の食する所と為りて枯朽に至り易く、栗木を栽えんと欲す。其れ栗種十余石を備えて上林園に送れ、と。『世宗実録』巻一一七、二九年八月己巳（一〇日）条

ここにいう「都城四山」とは、王都漢城を取りまく白岳山・仁旺山・駱駝山そして木覓山（南山）を指す。松の木は虫害のために枯れやすいことから、栗の木に変更すべく、上林園にて植林を試みたようである。

その後、文宗元年（一四五二）七月に上林園にて栽培されていた梨が今年は不作であつたため、薦新・進上および大小の国家祭祀に支障を来し、特例として北方の咸吉道（のち咸鏡道）にその進上を命じたことがある⁴¹⁾。ただ、これ以降は園林空間としての上林園は次第に実録記事から姿を消すようになり、後苑という用語に収斂されていったものと考えられる。

二 昌徳宮後苑の造成事業

昌徳宮後苑の機能について、たとえば鄭在鍾氏は次のごとく述べた⁴²⁾。

朝鮮歴代国王のうち、昌徳宮後苑を造成した王をみると、世祖・光海君・仁祖・英祖・正祖など困難な逆境を乗り越えた創業主と、深く高い学問の崇尚と調和の眼識をもつた君主たちである。我々はここから何をみることができるのかといえば、既存の秩序のなかに縛られ、不自由な束縛から心身の疲労を解消しようとする、本然的人間の安息を渴望する一面をみることができる。

いささか観念的な叙述であり、たとえば世祖（在位一四五五～六八年）が昌徳宮の後苑にいかなる建造物を設けたのか、そこではどのような行事が催されていたのかなど、具体的な史料の提示はなされていない。これに対して洪順敏氏は、

後苑は国王と王室のひそかな専用の休息空間にとどまらず、政治と行政ひいては学問と文化の本山であつて、宮闕の本質を延長する空間であつた。

と、昌徳宮後苑の本質を喝破する。⁽⁴³⁾しかしながら、一般読者を対象とした論考であるため、やはり後苑の個々の建造物が果たした機能に関して具体的に実証したわけではない。そこで、ここでは朝鮮初期の昌徳宮後苑に設置された各種建造物の沿革とその機能について、実録記事を心に追跡することにした。

【表】朝鮮初期における昌徳宮後苑の沿革

年代	西暦	沿革事項
太宗5年10月	1405	太宗、昌徳宮を創建。
6年4月	1406	昌徳宮の東北隅に解愠亭を造る。池あり。
6年5月	1406	昌徳宮の北に仁昭殿の建造を命ず。
7年8月	1407	仁昭殿を文昭殿と改称。
14年6月	1414	解愠亭を慎独亭と改称。
世宗15年5月	1433	文昭殿の神位を景福宮の新文昭殿に移す。
世宗5年9月	1459	後苑に池を穿つ。
7年11月	1461	この頃までに閼武亭あり。
9年2月	1463	後苑の東牆と北牆を拡張。
14年8月	1468	無逸殿の建造を命ずるも、世祖不豫のため工役を罷む。
成宗8年3月	1477	採桑壇を築造し、中宮が先蚕親祭を行う。
燕山君3年正月	1497	後苑の都總府から火薬庫までの宮牆を高く改築するよう命ず。
9年11月	1503	後苑牆外の人家の撤去を命ず。
11年5月	1505	瑞愍臺の建造を命ず。池あり。
中宗2年閏正月	1507	瑞愍臺の撤去を命ず。

*ソウル特別市史編纂委員会編『서울特別市史—古蹟篇』(ソウル特別市、ソウル、一九六三年一月)一九五頁の「秘苑沿革表」、および文化財庁編『창덕궁 유물』(1405-2005)(文化財庁昌徳宮管理所、ソウル、二〇〇五年一月)一一〜三一頁を参考に作成

(1) 解愠亭 — 昌徳宮後苑の誕生 —

太宗五年(一四〇五)に太宗は昌徳宮を創建すると、在位期間中のはほとんどをこの昌徳宮にて起居するようになり、景福宮を法宮とし昌徳宮を離宮とする「両闕体制」の端緒が開かれた。そして翌年四月、昌徳宮の東北隅に解愠亭が建てられることになる。

解愠亭を昌徳宮の東北隅に作る。上、知申事黃喜に謂いて曰く、今新亭成り、権近をして之を名づけしむるに、清寧と名づけんことを請う。蓋し、天清地寧の義を取るなり。然れども便ならざるに似たるに、予、改むるに解愠を以てせんと欲す。若何、と。左右曰く、甚だ善しと。上、笑いて曰く、人君言を発せば、臣下必ず声を同じうして之を答む。當に更めて権近と之を議すべし、と。遂に其の家に即りて之を問わしむるに、近曰く、善しと。是に於いて以て新亭を命ぐ。(『太宗実録』卷一一、六年四月己巳〔九日〕条)

賛成事(議政府の従一品)権近(一三五二〜一四〇九年)は、天地がよく治まって安らかであるとの意味から「清寧亭」と名づけるよう考えていたが、太宗の意向により「解愠亭」と決定した。⁽⁴⁴⁾「解愠」とは字義どおり怒りを解く、恨みをやわらげるの意である。太宗四年に漢城遷都を決定して以来、太宗と太祖との関係が改善した⁽⁴⁵⁾ことを念頭に置いた命名であつたとも考えられる。解愠

亭の前には池があり、太宗はしばしばここで宗親とともに宴を楽しんでいる⁴⁷⁾。太宗は解愠亭に出御すると、成均館大司成（最高学府成均館の長官。正三品堂上官）を召して『周易』『春秋伝』を講じさせ、ときには擊毬（ボロ）の観覧に興じた⁴⁸⁾。解愠亭では火車と呼ばれる軍事車両が公開され、仏教信者でもある太宗は釈迦の生誕を祝う観灯など仏教行事もここで行った⁴⁹⁾。早魃の際には重臣を漢城の北郊に派遣して祈雨祭を実施させる一方、太宗自身はこの解愠亭の前で終夜跪いて祈祷したこともある⁵⁰⁾。その後、太宗一三年四月には広延楼と解愠亭前の池魚が慶会楼下の大池に放れた、との記録が残る⁵¹⁾。

ところが、太宗一四年六月に後苑の解愠亭は慎独亭と改称された。

解愠亭を改めて慎独亭と為す。上、河崙に謂いて曰く、前朝の季、宮中に小亭有りて解愠と曰う。今の亭名と相い似たるに、改むるに慎独を以てせんと欲す。如何、と。崙曰く、此の亭、宮北に在りて、群臣侍従の処に非ず。名づくるに慎独を以てするは甚だ美なり、と。（『太宗実録』巻二七、一四年六月戊午（一七日）条）

そもそも権近の提案を却下して「解愠亭」と命名したのは太宗自身であったが、高麗末期の宮中にも解愠亭なる小亭があったことが判明した。『高麗史』によれば、たしかに高麗王朝滅亡直前の恭讓王四年（一三九二年）六月に「鵲鵲（このはずく）、解愠亭に鳴く」との記録がみえる⁵²⁾。領議政府事（議政府の長官。正一品）河崙（一三四七〜一四一六年）も「此の亭、宮北に在りて、群臣侍従の処に非ず。名づくるに慎独を以てするは甚だ美なり」

と賛同したように、群臣が侍従することなく、国王がまさに「独りを慎む」場所であった。

以上みたように、昌徳宮を離宮とした太宗年間に解愠亭（慎独亭）は後苑の唯一の楼亭として存在した。ただし、景福宮に移御した世宗年間以降、この楼亭に関する記録は途絶える⁵⁴⁾。

（2）文昭殿と広孝殿 — 太祖と太宗の真殿 —

朝鮮初期の文昭殿と広孝殿については国王の家廟である原廟制度の整備過程を追跡した池斗煥・韓亨周両氏のほか、その忌晨祭を論じた李賢珍氏の論考に言及があり⁵⁵⁾、文昭殿に関しては筆者もまた正朝・冬至における宮中儀礼との関連から触れたことがある⁵⁶⁾。文昭殿の位置とその機能については、以下に引用する『世宗実録』地理志の記録が簡便であらう。

文昭殿〔初め文昭殿を昌徳宮の西北に建て、太祖康献大王・神懿王后の神御を奉安す。又た広孝殿を昌徳宮の東北に建て、太宗恭定大王・元敬王后の神御を奉安す。後ち宋の景霊宮の制に依り、原廟を景福宮城内の東北に改営す。前廟後寝、一に古礼に遵う。因りて文昭殿と名づけ、両殿の神御を移安す。〕

（『世宗実録』巻一四八、地理志、京都漢城府条）

つまり、文昭殿とは太祖とその王妃神懿王后韓氏（一三三七〜九一年）の神御（肖像）を奉安した真殿であって、中国北宋代の原廟である景霊宮をモデルとしたことは一目瞭然である。北宋の景霊宮は第二の宗廟ともいわれ、皇帝・皇后の神御が奉安されていた⁵⁷⁾。当初、朝鮮では太祖七年（一三九八）十一月に韓氏を神懿王后と追尊する際に真殿は仁昭殿と命名され、その翌月に神懿王

後の神御が奉安された。⁸³⁾ 広孝殿とは本来、世宗二年七月に死去した太宗妃元敬王后閔氏（一三六五～一四二〇年）の位版（位牌）を奉安した原廟であって、神御は奉安されていない。⁸⁴⁾ その原廟は漢城の「徳盛坊」に建設され、世宗二年九月に広孝殿と命名された。⁸⁵⁾ 『世宗実録』地理志および『新增東国輿地勝覧』には漢城府東部一二坊のなかに「徳成坊」の坊名がみえることから、ここがおそらく昌德宮のかつての東北部を指すのであろう。

実録記事によれば、太宗六年（一四〇六）五月に太宗は昌德宮の西北に仁昭殿（のち文昭殿）の改営を命じている。さきにみた解愠亭の建設からわずか一ヶ月後のことである。

命じて仁昭殿の基を開かしむ。上、將に仁昭殿を昌德宮の北に改營せんとし、北門を出で、書雲觀に命じて地を卜せしむ。劉旱雨啓す、昌德宮の主山の氣、此の地に蓄う。若し掘りて室を営まば、必ず宮闕に利せず、と。上、李稷を召して之を議せしむ。稷曰く、主山の脈に非ず。乃ち別に穹窿を出し、南面の勢を為すなり。殿下、若し近地を択びて真殿を営まば、則ち此の地を踰ゆるは無し、と。上、悦びて即ち基を開かしめ、解愠亭に還りて置酒す。稷以下諸代言、次いでを以て爵を進む。（後略）（『太宗実録』卷一一、六年五月丙辰（二七日）条）

風水地理的観点からやや論難はあったものの、吏曹判書李稷（一三六二～一四三二年）の支持によって真殿の仁昭殿は昌德宮の北部に建設されることとなった。このとき、真殿の工事中工を視察した太宗は解愠亭にて酒宴を催している。『太宗実録』にいう「昌德宮の北」の正確な位置関係は不明ながら、のちに世宗が

兩議政に「初め、文昭殿は昌德宮重墻の外に在り、殿の墻東に一仏堂有りて、七僧之を守る。（中略）癸丑年（＝世宗一五年）移安の時、因りて破壊し、今に至るも未だ復せず」として旧文昭殿西北の空き地に仏堂を構える意向を示したところ、「不可なり。而も宮城の内に在るは、尤も以て不可と為す」と反対し、都承旨李思哲（一四〇五～五六年）以下の承政院官員もまた「禁内に仏堂を設くるは、固より不可なり」と異を唱えたことがある。⁸⁶⁾ さらに議政府左參贊（正二品）鄭革（？～一四五四年）もまた仏堂建設の非を訴えつつ、「上の教に重墻の外に在るを以て辞と為すも、然れども昌德宮の文昭殿は本より闕内重墻の外にあらざるなり。闕に近きの処に在り、外人の通行を禁ぜんと欲し、故に垣墻を築き以て闕に連ぬるのみ」と発言している。⁸⁷⁾ こうした論議は、文昭殿が昌德宮の二重の墻壁の外にありながらも、そこはあくまで「宮城の内」であり「禁内」であつたことを示唆する。つまり、「昌德宮の北」とは昌德宮の北部に広がる禁苑のなかの北部を指すのであろう。⁸⁸⁾ 広孝殿の位置に関しては、のち中宗死後に魂殿を定める際に「太宗昇遐の時の魂殿は乃ち広孝殿にして、闕外に在るに似たり」との記録がみえる。⁸⁹⁾ 広孝殿は建造当初、「闕外」にあつたようだが、文昭殿と同様、のちに墻壁を築いて「禁内」に取り込まれたに相違ない。

さて、太宗八年五月に太上王（太祖）が死去すると、太祖の棺は京畿楊州の健元陵に葬られ、虞主（位牌）は仁昭殿に奉安された。⁹⁰⁾ 仁昭殿が文昭殿と改称されたのはこの年八月のことである。⁹¹⁾ 同じく太宗八年一〇月に太宗は亡き太祖と太祖妃神懿王后の虞主をここ文昭殿に奉安した。⁹²⁾ その後、太宗一〇年七月に太祖と神懿

王後の位牌が宗廟へ移されると、文昭殿には仏教式に太祖と神懿王後の肖像を奉安した。^⑧文昭殿は世宗一五年（一四三三）五月に広孝殿とともに景福宮の東北に移転となり、その跡地は世宗の実兄である讓寧大君（太宗の長男。一三九四～一四六二年）に譲られることになる。^⑨

（3）閱武亭 — 習陣・閱武のための樓亭 —

本稿の冒頭にみたように、『新增東国輿地勝覽』苑囿条によれば昌德宮後苑には閱武亭が存在した。世祖五年（一四五九）九月に世祖は景福宮から昌德宮に移御し、後苑に池を穿ったという。^⑩昌德宮後苑には解憚亭前の池だけでなく、あらたに人工池が造成されたことは疑いないが、この人工池が閱武亭の附属施設であったか否かは判然としない。ただ、世祖二年三月には景福宮後苑に翠露亭が建設され、その樓亭の前に池が穿たれたことを想起すれば、世祖は昌德宮後苑の整備にも意欲を示していたことは十分に読み取れよう。

閱武亭に関しては情報が限られるものの、字義どおり軍事訓練の視察を目的とする施設であろうことは容易に推測できる。^⑪閱武亭の初見は以下に示す世祖七年十一月の実録記事である。

閱武亭に御す。王世子及び臨瀛大君瑔（世宗の四男）・桂陽君璿（世宗の庶出。世祖の異腹兄弟）・翼峴君璿（世宗の庶出）・烏山君澍（臨瀛大君の長男）・鈴川府院君尹師路・河城尉鄭顯祖・延昌尉安孟聃・領議政鄭昌孫・左議政申叔舟・右議政權寧・南陽府院君洪達孫・楊山君楊汀・戸曹判書曹錫文・行上護軍金漑・戸曹參判李克堪・漢城府尹黃孝源・

都承旨金從舜等入侍し、平安道防禦の事を議す。昌孫等、赴防軍官李守義・金有完・柳仁渥・辛鑄・崔命剛・吳衍等を抄啓す。上、之を允す。仍りて酌を設く。（『世祖実録』卷二六、七年十一月己酉（一三三三）条）

当時、朝鮮東北境では女真族が義州を攻撃し、朝鮮軍と衝突する事件が発生していた。^⑫そのため、世祖は王世子以下宗親・高級官僚とともに閱武亭にて平安道の防禦体制をめぐる議論し、酒宴を催している。ついで世祖代には、閱武亭において観射の行事が実施されたとの記録を二件確認することができる。^⑬従来は看過されていたが、世祖は晩年に「閱武亭二間の材を撤し、臨瀛大君の亭子を加構せよ」と、土木・營繕を担当する繕工監（正三品衙門）に命じていることから、閱武亭は大規模な建築であったと察せられる。

その後、睿宗即位年（一四六八）一二月にこの閱武亭にて弓術を競わせ、睿宗元年閏二月にも睿宗が閱武亭に行幸し、後苑にて慶尚道の軍士に陣法を訓練させた。^⑭朝鮮初期の景福宮後苑では序賢亭と忠順堂が閱武の場として機能していたから、昌德宮後苑ではこの閱武亭が同等の樓亭として活用されたのであろう。のち朝鮮後期になると、正祖（在位一七七六～一八〇〇年）は閱武亭の跡地に奉讓堂（寿静堂（のち寿静殿）の東北）を建て、歴代国王の御筆のほか『璿源系譜紀略』『春秋左氏伝』などを奉安した。^⑮

三 昌德宮後苑の拡張

（1）新茅亭と無逸殿

世祖七年（一四六一）十一月に世祖は中宮（貞熹王后氏）・

王世子（のち睿宗。在位一四六八～六九年）とともに景福宮より昌徳宮に移御すると、宮城の拡張計画に着手した。⁸³昌徳宮後苑の拡張事業については、翌年正月末の実録記事にその具体的な計画が記されている。

初め上、昌徳宮後苑の浅狭を以て、広く東墻を築かんと欲す。是に至り、繕工提調に命じて基の址を審定せしむ。周圍凡そ四千二百尺、其の内、人家は凡そ七十三なり。命じて二月に及んで皆な撤去せしむ。其の家主は戸を復くこと三年、漢城府をして願いに従い隙地を折給せしむ。『世祖実録』卷二七、八年正月乙丑（三〇日）条

当時の昌徳宮後苑は手狭であり、世祖はその東側を拡張したいと考えていたようである。工事を命じられたのはいうまでもなく、繕工監である。その周囲はおよそ四千二百尺（营造尺換算で約一・三km⁸⁴）で、民家七三戸は翌月の二月を期限として撤去するよう王命が下った。家主は三年間に限って復戸つまり徭役が免除され、漢城府は希望者に対して転居先を補償することになる。⁸⁵後苑の拡張工事はこれより始まったとみえ、一年後の世祖九年二月に世祖は中宮とともに工事の進捗状況を視察している。当初は先にみたとおり東側の民家七三棟を撤去する予定であったが、さらに北側の民家五八棟も撤去された。⁸⁶その周囲はおよそ四千尺（約一・二km）であり、東側もさらに四百尺ほど広げられたことから、後苑の拡張面積は当初の計画より倍増したことになる。

では、世祖代に拡張された昌徳宮後苑には具体的にいかなる建造物が設けられたのであろうか。史料の制約は否めないが、世祖一三年四月頃にはあらたな茅亭がすでに後苑に設置されていた。

上、中宮と後苑の新茅亭に御す。詳定所堂上及び諸將・承旨等、入侍す。命じて鄭文炯を大将と為し、兼司僕數十人を率いて苑中の禽獸を驅逐せしめ、崔適等の射を善くする者十一人をして之を射さしむ。（後略）『世祖実録』卷四二、一三年四月甲寅（一九日）条

世祖は中宮とともに後苑に出御し、苑中の禽獸を放つてこれを射させたという。世祖はこの年世祖一三年四月六日に昌徳宮に移御し、同年五月二〇日に中宮とともに景福宮に還御していることから、世祖は四月一九日には昌徳宮にいたことになる。つまり、ここにいる後苑とは昌徳宮の後苑である。従来、この実録記事をもとに「世祖朝にはこの亭子（『閔武亭』）の他にも新茅亭があり、その一四年八月には無逸殿という建物が营造された」⁸⁷、あるいは「閔武亭の他にも世祖朝には新茅亭という亭子があり、世祖一四年八月には無逸殿という建物が造られた」⁸⁸、と叙述されている。茅亭とは字義どおり、茅葺きの樓亭を意味しよう。しかしながら、既往の研究では「新」の意味は説かれていない。

茅亭が遅くとも世宗三年（一四二一）六月には設けられていたことは、以下の記録から明らかである。

上王、上とともに茅亭に御し、視事す。亭甚だ窄く、惟だ趙涓・趙末生・尹淮・金益精・韓恵のみ侍坐して小酌を設く。『世宗実録』卷一二、三年六月戊申（一七日）条

上王太宗は世宗とともに茅亭にて視事したという。この年五月上旬に昌徳宮では宮女の多くが罹患したため、世宗は中宮とともに景福宮に移御し、二ヶ月後の七月上旬に昌徳宮に還御した。⁸⁹とすれば、おそらくこの茅亭は景福宮内にあったと思われる。その

後、世宗代にこの茅亭に関する記録がないのは、樓亭が狭隘ゆえ使用頻度が低かったのであろう。そして世祖七年十一月になると、実録記事には「上、歩きて後苑に至り、李純之等をして茅亭を構うるの基を相せしむ」とみえる。⁹¹世祖は当初、景福宮後苑にあらたな茅亭の造成を予定していたが何らかの事情で断念し、結局は昌徳宮後苑に茅亭を新築したものと考えられる。つまり、新茅亭は昌徳宮後苑に新築された茅亭という、素朴な名称であったのである。

一方、無逸殿の場合、世祖は同じく世祖一三年四月にその造営を計画していたが、民弊を考慮して中断していた。⁹²世祖一四年八月の実録記事によると、

命じて新殿を昌徳宮後苑に構えしむ。名づけて曰く、無逸殿と。金漑・金国光・盧思慎・李克増をして役を董さしむ。上、蓋し伝位して怡養せんと欲すればなり。『世祖実録』卷四七、一四年八月辛丑（一四日）条

とみえ、無逸殿の建造は世祖一四年八月に始まったとするのがより正確であろう。世祖は王位を王世子に禅譲し、この新殿にて隠居生活を送るつもりであったが、これより一〇日後の実録記事には「昌徳宮後苑の新殿の役を罷む」という断片的な記録が残る。⁹³従来は看過されてきたが、ここにみえる「新殿」とは無逸殿のことであろう。その後、世祖は翌月の九月に寿康宮（のち昌慶宮）にて死去しており、⁹⁴無逸殿に関する記録も途絶える。つまり、無逸殿の造営事業は完了しなかったとみななければならない。

（2）採桑壇——中宮の先蚕儀礼——

成宗代（一四六九〜九四年）の昌徳宮後苑の様子についても触れておくべきであろう。景福宮勤政殿にて即位した成宗はまもなく昌徳宮に移御し、のち大造殿にて死去するまで昌徳宮を離れることはなかった。⁹⁵当該期の昌徳宮後苑に関しては、『新增東国輿地勝覧』壇廟条に次のような記録がある。

先蚕壇（東郊に在り。制、風雲雷雨と同じ。神座は北に在り、南向す。成宗九年春、又た壇を昌徳宮後苑に築く。王妃、命婦を率いて親祭し、親蚕礼を行う）。『新增東国輿地勝覧』卷一、京都上、壇廟条

朝鮮王朝では当初、東大門外の東郊に先蚕壇を築いていたが、⁹⁶成宗九年（一四七八）の春に昌徳宮後苑にも祠壇（採桑壇）を築き、王妃は命婦を率いて親蚕儀礼を挙行したという。先蚕儀礼は本来、先農祭とワンセットの祭祀儀礼であって、古代中国の皇帝がみずから農具を手を耕し、皇后がみずから桑摘みをする一連の国家儀礼に由来する。唐代では皇后が宮中の禁苑内でみずから先蚕儀礼を行い、宮中の女官や外官の夫人たちが集まって盛んに催された。⁹⁷こうした古代中国の親蚕儀礼に関する情報を収集・検討しつつ、朝鮮政府が後苑における先蚕儀礼を制度化したであろうことは、容易に推測できる。

ただし、昌徳宮後苑に採桑壇が築造されたのは「成宗九年春」ではなく、前年の成宗八年春のことである。礼曹の建議により採桑壇の規模は宋の制度に準じるとするなど、成宗代における親蚕儀礼の整備過程に関しては朴慶龍・韓亨周両氏によつてほぼ明らかになっている。⁹⁸採桑壇の築造時期について補足すれば、成宗八

年三月三日の実録記事に「繕工監、採桑壇を後苑に築く」とあり、繕工監の指揮のもと後苑に採桑壇が築造された。^⑧

成宗代に中宮が実施した親蚕儀礼の事例は、以下に示す二件である。

中宮、内・外命婦を率いて採桑壇に詣み、親蚕すること儀の如くす。百官、箋を進めて陳賀す。(後略) (『成宗実録』巻七八、八年三月辛巳(一四四)条)

王妃、後苑の採桑壇に幸し、王世子嬪及び内・外命婦を率いて親蚕すること儀の如くす。○王世子及び百官、陳賀するに権停礼を用てす。(後略) (同書巻二七五、二四年三月丙戌(二二四)条)

まず、採桑壇の築造より一〇日後の成宗八年三月一四日、成宗継妃貞顯王后尹氏(一四六二〜一五三〇年)は内・外命婦を率い、後苑の採桑壇にて親蚕の祭祀儀礼を執り行ったのち、文武百官は賀礼を行っている。その後、成宗二四年三月二一日にも成宗継妃は王世子嬪以下、内・外命婦を率い、後苑にて親蚕儀礼を実施すると、王世子と百官が権停礼(略式の儀礼)ながら賀礼を行った。王妃による親蚕儀礼に先立ち、成宗は三月一〇日に東郊の先農壇にて親祭し、籍田を親耕していたから、ここに朝鮮国王による先農祭と中宮による先蚕祭という、農本主義に立脚した理想的な王朝儀礼が実現したことになる。事例は少ないものの、採桑壇が築かれた昌徳宮後苑は、王妃と宮中に住まう女性たちによる国家儀礼の場でもあったことは注目してよからう。

同じく成宗代には昌慶宮後苑に環翠亭が新設された。周知のように、成宗一四年春より三人の大妃(世祖妃・徳宗(追尊)成宗

の生父)妃・睿宗継妃)の居所として寿康宮を拡張し、翌年九月下旬に昌徳宮の東側に周囲約四千三百尺(約一、三km)の昌慶宮が竣工した。昌徳宮後苑と昌慶宮後苑が通じていたことも、すでに本稿の冒頭に掲げた『新增東国輿地勝覧』苑囿条にみたとおりである。環翠亭の着工とその命名は二ヶ月前の成宗一五年七月のことである。『新增東国輿地勝覧』宮闕条には、

環翠亭「通明殿の北に在り。【新增】金宗直記す、昌慶宮の後苑に新亭有り。曰く環翠と。直ちに通明殿の北奥に通ず。(後略)」。『新增東国輿地勝覧』巻一、京都上、宮闕条、昌慶宮の項)

とあり、この記録はすでに韓国の学界でも紹介されているが、環翠亭の機能についてはいまだ等閑視されたままである。昌慶宮の竣工から二年を経た成宗一七年九月の実録記事によれば、

上、宗親を環翠亭に宴す。月山大君娉等入侍し、小的を射るを観る。(『成宗実録』巻一九五、一七年九月己未(二七四)条)

とみえる。わずかな事例ではあるが、昌慶宮後苑の環翠亭では月山大君(成宗の兄。一四五四〜一八八八)をはじめとする宗親とともに宴が催され、観射の行事が執り行われたことを指摘しておきたい。^⑨

なお、同じく成宗一七年九月の実録記事には次のような記録もみえる。

上、曲宴を両大妃殿に進む。命じて宗親一品以上・議政府・六曹参判以上・儀賓府・漢城府・承政院・弘文館・藝文館・入直の諸將を後苑に会せしめ、酒樂を賜う。仍りて命じて射

侯・投壺せしむ。『成宗実録』巻一九五、一七年九月甲寅
 (一二日)条)

この日、成宗は徳宗妃と睿宗継妃のために曲宴を催し、後苑に召し出された官僚は酒席を賜って射侯に、あるいは投壺に興じたという。投壺とは、短く細い矢青銅製の壺に投げ入れて命中率を競う競技である。すでに大妃のための居所として昌慶宮が完成していることから、ここという後苑とは昌慶宮後苑もしくはそこに通じる昌徳宮後苑であろう。

(3) そして享楽の場へ ― 燕山君代 ―

昌徳宮にて即位した燕山君(在位一四九四―一五〇六年)もまた在位中、昌徳宮を離れることはなかった。^⑩燕山君代の昌徳宮後苑の拡張に関しては、須川英徳氏がすでに簡潔に整理している。まずはその概要を以下に示す。

燕山君は、まず、宮殿に隣接して建てられている民家を撤去させたが、続いて、彼の享楽の場である昌徳宮の北側や東側に位置する民家などを撤去させ、城外に移住させようとした(八年二月己未条)。実はその付近はやや小高い丘陵になっており、そこからは昌徳宮の後苑が覗き見えたからである(九年一月乙丑条)。さらに、宮闕の外壁を高くすることや宗廟と昌徳宮の正門前にあたる鍾路の梨峴に壁と門を作って人の立ち入りを禁止し、どこからも宮殿の様子そのものを窺えないようにすることを計画し、景福宮周辺の民家も撤去することを指示した(九年十一月)。^⑪

須川氏は燕山君代における「漢城の改造」を燕山君八年(一五

〇二)から説き起こすが、燕山君による後苑の拡張は五年前の燕山君三年正月に始まる。実録記事によれば、

伝して曰く、宮牆外の人家、多く後苑を圧臨す。都摠府(中央軍を指揮する五衛都摠府)より火薬庫に至るまで宮牆を改築し、高峻ならしめよ、と。『燕山君日記』巻二一、三年正月丙午(四日)条)

とあり、王宮外の民家からは後苑を見下ろすことができるため、燕山君は後苑の西牆を高く改築しよう命じている。その後、すでに指摘されているとおり燕山君八年二月に再度、民家の撤去命令を下したのである。^⑫とくに燕山君が気にかけたのは地形がやや小高い昌徳宮の東北、具体的には成均館大成殿の北側であった。燕山君は期限内に立ち退かない住民ばかりでなく、違反者を検挙できない官吏までも処罰の対象とした。さらに住民のなかには垣牆を飛びこえて王宮内に侵入する者まで出たという。^⑬

ところが、燕山君による後苑の拡張事業はスムーズに進行したとはいえない。燕山君九年十一月の実録記事には以下のごくみえる。

承政院に伝して曰く、大内に臨圧する人家、曾て撤去せんと欲すれども、言者に因りて止む。一度撤去せば、乃ち可なること無からんや。若し人家有りて卿等の家を圧見せば、卿等の意に於いて何如、と。承旨等啓す、家内を臨圧せば、其れ孰か之を肯んぜん、と。

伝して曰く、梨峴の行人、大内を臨視するは甚だ不可たり。其れ門を作り、唯だ行幸の時のみ開くを得さしめよ、と。

(いずれも『燕山君日記』巻五一、九年十一月乙丑(二日)条)

燕山君は王宮を見下ろすような民家は撤去したいと考えていたが、言官によりこれを中止した、と承政院に語っていることから、政府内には反対論者が多かったものと推測される。それでも納得できない燕山君は承旨の同意を取りつけ、西は尼寺の淨業院より東は成均館に至るまで、後苑の東牆・西牆外の民家を撤去するよう命じた。^⑩ときには鷹匠が王宮の垣根を跳び越えて侵入したこともあったというが、渦中の燕山君が「不肖の輩は、予が藩籬を設けて遊宴していると思っておる」と周囲の噂を気にかけていたのも事実である。^⑪こうして一月末を期限とする民家の撤去命令が下り、一月二八日には後苑東牆外の民家は撤去された。^⑫ただし、宗廟前の鍾路の梨峴（いまの鍾路四街附近）に門を作つて通行を禁止するとの計画が、はたして実現したか否か判然としない。兵曹判書姜龜孫（一四五〇～一五〇六年）は冬の寒さが厳しいことから、しばらくは門ではなく木柵を立てるよう建議しており、梨峴に門が完成したとの記録は『燕山君日記』にみいだすこととはでない。^⑬

では、燕山君代に拡張された昌徳宮後苑にはあらたな建築群が生まれたのであろうか。『ソウル六百年史』によれば、燕山君一〇年七月の『燕山君日記』に「伝して曰く、……閔武亭・七徳亭・喜雨亭をあわせて造成するよう命じた」とあると解釈し、燕山君が後苑に七徳亭と喜雨亭を造成させたという。^⑭しかし、この解釈にはいささか疑問がある。実際の実録記事をみてみよう。

伝して曰く、黄阜及び慕華館、已に閔武亭・七徳亭を造らしむ。喜雨亭も并わせて造成せしめよ。喜雨亭の若きは則ち中朝使臣、遊観の地なるに、尤も造らざるべからず、と。（後

略）（『燕山君日記』巻五四、一〇年七月癸巳〔五日〕条）

そもそも、ここで燕山君が造成事業の対象地としたのは黄阜と慕華館であつて、昌徳宮後苑ではない。慕華館は敦義門（俗称、西大門）外の西北にある明使のための迎賓館であり、黄阜とはおそらく弘化門（のち恵化門と改称。俗称、東小門）外の丘陵地を指すのであろう。^⑮このうち閔武亭は前節でも検討したように世祖代に後苑に造成されている。それゆえ『ソウル六百年史』ではこの『燕山君日記』の記録は閔武亭の重修を意味すると推測するが、ここにみえる閔武亭とは黄阜および慕華館にあらためて建造を命じた樓亭であろう。また、七徳亭とは漢江下流に近い樓亭であり、かつて世祖はしばしば閔武のためここに行幸している。^⑯それゆえ、やはり燕山君は閔武のための樓亭を黄阜と慕華館に建造（もしくは移築）したいと考えていたのであろう。喜雨亭（望遠亭）もまた漢城西部の楊花渡東岸にあつた樓亭であつて、かつては孝寧大君の別荘であつた。^⑰燕山君は喜雨亭を「中朝使臣、遊観の地」と評価しており、明使のみならず自身の「遊観の地」としたかつたに相違ない。^⑱ところが、燕山君が命じた造営の対象が多すぎることから、この年八月下旬になると昌慶宮明政殿の西側にある仁陽殿の重修を最優先することが決定した。^⑲喜雨亭も二年後の燕山君一二年八月になつてようやく改構が命じられ、秀麗亭と改称されたが、燕山君最晩年の一時的な措置であつたと思われる。七徳亭にしろ、明宗一八年（一五六三）に明宗（在位一五四五～六七年）は武才を覲るべく景福宮を出発して崇礼門（俗称、南大門）を出たのち、七徳亭に到着したとの記録が残っており、漢江下流にあつた七徳亭が昌徳宮後苑に移建された形跡はない。^⑳したがって、燕

山君が七徳亭と喜雨亭を昌徳宮後苑にあらたに造成させたという『ソウル六百年史』の叙述は、誤解を招きかねない。

当時は小高い丘陵にあった成均館を閉鎖し、文廟に祀られていた先聖・先師の位牌も崇礼門内の太平館（明使の宿泊施設）に移すことが決定した時期に相当する。奢侈と酒色に溺れた燕山君は、大内氏・少弐氏など西日本の有力大名が派遣した使節に対する接見もままならなかった。「朝貢分子」たる倭人と野人は徒歩で、あるいは馬を奪って漢城まで上京したが、王都では彼らに対する接待儀礼も行き届いていなかったのである。その一方で燕山君は正朝・冬至の対明遥拝儀礼（望闕礼という）と朝賀礼そして会礼宴をほぼ忠実に実施しており、揺らぎつつあった王権を強化していたことも事実である。

さて、燕山君代における後苑の拡張に関してもっとも注目すべきは瑞葱臺の建設であろう。瑞葱臺の建設についてすでに『ソウル特別市史』などに紹介されたほか、朝鮮時代の庭園の代表例として昌徳宮後苑を取りあげた尹張燮氏が、

燕山君は、この場所で宮女たちと遊樂を事とし、大きい池を掘り高台をつくり、台上に千人が座ることができる大規模な瑞葱台を起工し労働者数万人を動員したが、工事を終えることができず廃位され、工事が中断撤去された故事もあった。

と叙述した^⑧。具体的な史料の提示はないものの、昌徳宮後苑が燕山君の手により享樂の場へと移行しつつあったことを描写している。実録記事を徴すれば、燕山君一一年五月に燕山君は景福宮の「慶会樓の如くせよ」と、昌徳宮後苑に瑞葱臺の造宮を命じた。

燕山君はすぐさま瑞葱臺の赴役軍を増員し、翌年の燕山君一二年

正月の記録には次のごとくみえる。

伝して曰く、仁陽殿・瑞葱臺畢役の後、東西城子を築くに、姑く城基に於いて長木を列ね植え、城内を遮蔽せよ、と。時に命じて仁陽殿を構え、又た石を累ねて臺を後苑に為り、龍を雕りし石闌干を作らしむ。坐すべきは千人、高さ十許丈なり。名づけて瑞葱臺と曰い、臺前に大池を鑿つ。差員一百監督し、役軍は数万なり。呼邪（ハ）大勢で力をあわせる際のかけ声）の聲、昼夜輟まず、声は天地を震わす。（『燕山君日記』卷六一、一二年正月辛亥（二一日）条）

瑞葱臺には龍の彫刻を施した華麗な欄干をめぐらし、臺上は千人を収容することが可能で、臺前には大きな池が穿たれた。のちに燕山君はこの池の深さを成人男性の身長十倍とし、大船でも運行できるよう命じている。須川氏はこの瑞葱臺が築山であったとみなすが、「石を累ねて臺を後苑に為^{つく}」とあるように、盛り土ではなく石造建築であったと思われる。後代の『宮闕志』は「瑞葱臺は古の試射の所なり」と記すが、本来は宴享もしくは観劇のための舞台施設であったものと推測される。瑞葱臺の工事には数万名が動員され、監督官だけでも百人が臨時に派遣されたという。同時に、天地を震わす労働者の悲鳴も聞こえてくる。

ところが、この年九月に燕山君は玉座から転落し（中宗反正）、瑞葱臺の工事も中断した。そして翌年の中宗二年（一五〇七）閏正月に瑞葱臺は「廃主（ハ）燕山君」の建築する所なり」との理由から撤去を命じられることになる。ただし、瑞葱臺の撤去命令は貫徹されなかったとみえ、五〇年後の明宗一五年（一五六〇）八月に明宗（在位一五四五く六七年）は後苑の瑞葱臺に親臨して儒

生に製述試験を実施し、翌九月には宰相・臣下とともに曲宴を催した^⑧。明宗一五年九月の曲宴を描いた絵画資料として、左賛成洪暹（一五〇四〜八五年）の序文（一五六四年四月）を記した「瑞葱臺親臨賜宴図」（韓国国立中央博物館蔵。絹本彩色。一二四、二×一二二、七cm）が現存する^⑨。

むすび

以上、本稿では朝鮮初期の基本史料である『朝鮮王朝実録』を中心に、宮中の庭園施設である後苑の管理機構、ならびに離宮昌德宮の後苑に点在する諸建築物の沿革とその機能について整理・分析した。考察の結果は以下のとおりに要約できよう。

（1）上林園は高麗末期の東山色を改称して太祖三年（一三九四）に発足した後苑管理機構であり、広義には空間としての後苑を指すこともある。上林園は薦新・進上と使客の接待のために各種の果物を管掌し、世宗五年（一四二三）に政府の高官が下級官庁の長官を兼任するいわゆる提調制を導入した。ついで世祖一二年（一四六六）の官制改革の際に掌苑署と改称し、正六品衙門として『経国大典』に定着する。その官衙が設置された漢城の北部鎮長坊は景福宮後苑の東側であって、昌德宮後苑からもそう遠くない距離にあった。一五世紀前半の上林園に関する記録は限定されるが、明帝に献上する処女の「管理」のほか、童男を集めての祈雨祭、王族のための祈祷など祭場としても活用された。近代になって昌慶宮内に動物園と植物園が開かれたように、朝鮮初期の上林園にも対馬島主から献上された動植物をはじめ、平安道・濟州島から届いた動物・果物も飼育・栽培されている。

（2）昌德宮後苑の建造物としてはまず、太宗六年（一四〇六）創建の解慍亭がある。解慍亭の前には池があり、太宗は酒宴、講論、撃毬の観覧のほか、釈迦の誕生日には観灯の仏教行事を執り行った。のち太宗一四年に慎独亭と改称され、文字どおり国王が「独りを慎む」場所となる。昌德宮を離宮とした太宗代に解慍亭は後苑唯一の楼亭として存在したが、世宗年間以降、この楼亭に関する記録は途絶える。解慍亭が創建された太宗六年には、昌德宮の西北に仁昭殿の建設が始まった。文昭殿とは太祖とその王妃神懿王后の肖像を奉安した真殿であり、そのモデルは中国北宋代の原廟景靈宮である。のち文昭殿は、太宗とその王妃元敬王后の肖像を奉安していた広孝殿とともに、世宗一五年に景福宮の東北に移転された。昌德宮後苑の第三の建造物としては閔武亭がある。世祖七年にはこの閔武亭で平安道の防禦体制をめぐって論議がなされ、睿宗代には弓術を競わせ、また陣法を訓練させた。情報不足は否めないが、閔武亭は字義どおり軍事訓練の視察を主たる目的とする施設であったと考えられる。

（3）世祖八年には昌德宮後苑の拡張工事が始まり、後苑東側の民家七三棟に加え、北側の民家五八棟も撤去された。東側は周囲およそ四千六百尺（約一、四km）、北側の場合はおおよそ四千尺（約一、二km）におよぶ拡張事業であった。世祖一三年には、かつて太宗が視事の間として利用していた景福宮内の茅亭が狹隘であったことから、昌德宮後苑にあらたな茅亭として新茅亭が設けられ、世祖はここで狩りを楽しんだ。翌年の世祖一四年八月中旬になると無逸殿の建造工事が始まり、世祖はここで隠遁生活を送るつもりであった。だが、一〇日後の八月下旬には「新殿」つま

り無逸殿の工事は中止となり、翌九月に世祖は死去した。その後、成宗八年（一四七七）には昌徳宮後苑に採桑壇を築造して中宮が先蚕親祭を執り行い、成宗一五年には昌慶宮後苑に環翠亭が建造された。そして昌徳宮後苑の拡張工事は燕山君代に引き継がれる。とはいえ、外国使節の引見、軍事訓練、政治・学問のサロンといった従来の後苑の機能とは相容れない事業であった。燕山君三年（一四九七）には王宮外の民家から後苑を見下ろすことができないよう、燕山君は後苑の垣根を高く改築するよう命じている。ところがその後、言官による反対論があったとみえ、燕山君八年に再度民家の撤去命令が下り、翌年には昌徳宮後苑の東牆・西牆外の民家を撤去するよう王命が下る。あらたな後苑の建造物として注目すべきは瑞葱臺である。瑞葱臺には龍の彫刻を施した欄干があり、臺上は千人を収容可能。そして臺前には池が穿たれていた。まさに景福宮の慶会楼を彷彿させる。燕山君一二年に起きた中宗反正により工事は中断し、翌年の中宗二年（一五〇七）に瑞葱臺はいわば「負の遺産」として撤去の命が下るが、のち明宗代には製述試験や曲宴の会場として利用されている。

註

- (1) 京城府編『京城府史』第一卷（京城府、京城、一九三四年三月。湘南堂書店、一九七二年六月復刻）「第二編第一章 李朝国初に於ける首府京城の建設」四五〇～四四頁。杉山信三『韓国の中世建築』（相模書房、一九八四年一〇月）「第一編第3章 朝鮮太祖の漢陽遷都と宗廟・宮殿及び城郭の

造営」六八頁、同「第1編第5章 太宗の造営活動」九九頁。ソウル特別市史編纂委員会編『서울六百年史—文化史蹟篇』（ソウル特別市、ソウル、一九八七年四月）「第一章 第2節 景福宮」三四～四一頁、同「第一章第3節 昌徳宮」（執筆はいずれも金東賢）五七～六七頁。洪順敏「朝鮮王朝宮闕經營과 兩闕体制」의 변천」（ソウル大学校大学院文学博士學位論文、ソウル、一九九六年二月）「二、조선전기 궁궐창건과 法宮—離宮 兩闕体制의 확립」二一～二三・三八～三九頁。

- (2) 高麗王朝（九一八～一三九二年）の王都開京は宮城（周圍約二・七km）—皇城（約四・七km）—外城（羅城。約二三km）の三重構造であった（細野涉「高麗時代の開城—羅城城門の比定を中心とする復元案」『朝鮮学報』第一六六輯、一九九八年一月、二四～二五頁）。しかし、朝鮮王朝の王都漢城の場合、その城郭は景福宮を取り囲む周圍一八七三步（約三・三八km）の宮城と、周圍九九七五歩（約一八km）の京城（都城）の二重構造をなす（『新增東国輿地勝覽』卷一、京都上、城郭条、京城および宮城の項）。つまり、漢城では前朝高麗や中国明代の北京城のように宮城の外側を囲む「皇城」は存在せず、漢城を取りまく山々の尾根筋に沿って建造された京城が外郭城としての「羅城」であったとみてよい。

- (3) 潘谷西主編『中国古代建築史』第四卷（元明建築）（中国建築工業出版社、北京、二〇〇一年三月）「第七章第二節 明代園林」三八八～三九〇頁。クレイグ・クルナス（中

野美代子・中島健記）『明代中国の庭園文化―みのりの場所／場所のみのり』（青土社、二〇〇八年八月）Ⅱ 美学の庭園」七二～七六頁。新宮学「明清北京城の禁苑」（橋本義則編『東アジア都城の比較研究』京都大学学術出版会、二〇一一年二月）。なお、東アジア庭園文化の源流ともいべき隋唐の皇室庭園については妹尾達彦「隋唐長安城の皇室庭園」（橋本義則編、前掲『東アジア都城の比較研究』所収）がその構造と機能を総合的に分析している。

- (4) たとえばソウル特別市史編纂委員会編『서울特別市史―古蹟篇』（ソウル特別市、ソウル、一九六三年十二月）「第一部第二章第一節Ⅰ 景福宮」、同委員会編、前掲『서울六百年史』「第一章第二節 景福宮」では景福宮後苑に関する叙述を欠く。また文化財管理局・国立文化財研究所編『景福宮―寝殿地域発掘調査報告書』（文化財管理局・国立文化財研究所、ソウル、一九九五年十二月）「第2章 景福宮沿革」二八～二九頁では一次史料の『朝鮮王朝実録』ではなく、第二四代朝鮮国王の憲宗（在位一八三四～四九年）年間に叙述されたと推定される『宮闕志』（筆写本）の断片的な記録を利用している。

- (5) たとえばソウル特別市史編纂委員会編、前掲『서울特別市史』「第一部第二章第一節Ⅲ 秘苑」一八六～一九六頁、同委員会編、前掲『서울六百年史』「第一章第3節 昌德宮」七八～八二頁。最近では文化財庁編『창덕궁육백년 1405-2005』（文化財庁昌德宮管理所、ソウル、二〇〇五年一月）が昌德宮の年表を作成した。

- (6) その後、昌德宮は光海君八年（二六一六）にほぼ再建工事を終え、大院君（第二六代国王高宗の生父。一八二〇～九八年）政権のもと高宗五年（一八六八）に景福宮が再建されるまで、昌德宮は朝鮮王朝の正宮として存続した。そのため、たとえば尹張燮（西垣安比古訳）『韓国の建築』（中央公論美術出版、二〇〇三年十二月。原著は尹張燮『韓國의 建築』ソウル大学校出版部、ソウル、一九九六年四月。増補版は尹張燮『한국 의 건축 (최신증보판)』ソウル大学校出版部、ソウル、二〇〇八年五月）「第27章第Ⅲ節Ⅰ 昌德宮後苑」は朝鮮後期の自然風景と建築群を叙述するにとどまる。

- (7) 朝鮮後期における昌德宮後苑の絵画資料としては『東闕図』（国宝二四九号、高麗大学校博物館所蔵。製作年代は一八二四～三〇年頃）の報告書として刊行された文化財管理局編『東闕図』（文化部文化財管理局、ソウル、一九九一年十二月）「東闕図Ⅱ가 昌德宮後苑」八七～九四頁、およびその増補版の文化財庁編『동궐도입기』（文化財庁昌德宮管理所、ソウル、二〇〇五年十二月）「동궐도입기―후원」一〇八～一三四頁が出色である。

- (8) 桑野栄治「朝鮮初期の『禁苑』―景福宮後苑小考」（橋本義則編、前掲『東アジア都城の比較研究』所収）。全滌玉『조선시대 도시조경론』（一志社、ソウル、二〇〇三年六月）「제2장 도시조경의 유형」五四～五五頁、同「제3장 도시조경의 행정체계」八一～八七頁。『掌苑署膳録』とは掌苑署の位置・官制・各部署の任務・財政な

- ど実務に関する記録(筆写本一冊)であり、作成年代は正祖一八年と推定されている。ソウル大学校奎章閣編『奎章閣韓国本圖書解題(史部2)』(ソウル大学校奎章閣、ソウル、一九八二年一月)二〇〇〜二〇一頁。
- (10) 田川孝三『李朝貢納制の研究』(東洋文庫、一九六四年一月)「第二編第一章 進上の種類と内容」二一三〜二四頁。
- (11) 田川孝三、前掲書「第二編第一章 進上の種類と内容」二一七頁。
- (12) 「龍山・漢江等処菓園踏損者、依禁獵例論」(『大典統録』卷五、刑典、禁制条)。「掌苑署果園、江華・南陽・開城府、則以本署奴各十五名差定看守、有闕則充定、其余収貢、果川・南陽・楊州・富平、則附近居民分定看守、官員往来考察時、草料・粥飯題給(「官庁の判決や指令」)(同書卷六、工典、栽植条。のち、この二条は英祖二〇年(一七四四)に成稿した『統大典』卷六、工典、栽植条に成文化される。
- (13) 「改車沙兀(「高麗時代に国王の護衛を掌った軍師)為司禁、東山色為上林園」(『太祖実録』卷六、三年七月戊申(一一一日)条。
- (14) 「吏曹啓各司実案提調及提調、(中略)上林園提調二、実案副提調一、(後略)」(『世宗実録』卷一九、五年三月乙巳(二四日)条)。
- (15) 「(前略)時更定官制、(中略)上林園改称掌苑署、置掌苑一、(中略)並秩従六品、(後略)」(『世祖実録』卷三八、一二年正月戊午(一五日)条)。
- (16) 金子裕之「平城宮の園林とその源流」(奈良文化財研究所編『東アジアの古代都城』奈良文化財研究所、二〇〇三年六月)一三三頁。
- (17) 『燕山君日記』卷六一、一二年正月丙戌(六日)条。全澤玉、前掲書「제3장 도시조경의 행정체계」八三頁によれば、「掌苑署は燕山君九年(一五〇三年)にしばらく廃止されたが、中宗元年(一五〇六年)にふたたび設置し」というが、掌苑署が燕山君九年に廃止されたことはない。
- (18) ソウル歴史博物館編『都城大地図』(同博物館遺物管理課、ソウル、二〇〇四年二月)第06面。同書所収の李相泰「도시대지도에 관한 연구」七二・七七頁によれば、『都城大地図』の製作上限年代は英祖二九年(一七五三)、製作下限年代は英祖四〇年と推定されている。
- (19) 李丙燾解題『靑邱図』乾(民族文化推進会、ソウル、一九七一年二月)七頁。また李相泰「古地圖를 이용한 18-19世紀 서울 모습의再現」(『서울학연구』第一号、ソウル、一九九八年二月)一四八頁の地図1「조선시대 관청 위치도」、参照。
- (20) 末松保和『高麗朝史と朝鮮朝史(末松保和朝鮮史著作集5)』(吉川弘文館、一九九六年一〇月)「麗末鮮初に於ける対明關係」(初出は京城帝国大学文学会編『史学論叢』第二、岩波書店、一九四一年一月)二七七〜二八五頁。
- (21) 洪順敏、前掲書「二、조선전기 궁궐창건과 法宮-離宮兩關体制의 확립」四六〜四七頁。
- (22) 『明宣宗実録』卷二六、宣德二年三月辛卯(三日)条。『世

- 宗実録』卷三六、九年四月己卯（二二日）条。
- (23) 『世宗実録』卷一三三、五礼、賓礼儀式、宴朝廷使儀条。
『国朝五礼儀』卷五、賓礼、宴朝廷使儀条。申明鎬「조선시대 접빈다례의 자료와 특징」(釜慶大学校歴史文化研究
所編『조선시대 궁중다례의 자료 해설과 연구』民俗苑、
ソウル、二〇〇八年二月) 二四～二九頁。
- (24) 「中宮御慶会楼、引見処女七人、設饌宴、処女之母及族親
亦與宴、饋執饌婢十人・從婢十六人於楼下、成氏・車氏從
婢各三人、其余各二人、夜、天氣清寂、悲泣之声聞于外、
聞者莫不傷悲」(『世宗実録』卷三七、九年七月甲辰(一八日)
条)。
- (25) この明使の滞在中に「伝旨、十四歳以上処女、許婚」(『世
宗実録』卷三六、九年五月戊子朔条)との王命が下っている。
- (26) 「移御于上林園、以重修思政殿・慶会楼也」(『世宗実録』
卷四三、一一年正月丙辰(九日)条)。内殿の思政殿は視事
の場として太祖四年(一三九五)九月末に、慶会楼は景福
宮で明使を正式に接待する場として太宗一二年(一四一一)
四月に竣工した。杉山信三、前掲書「第I編第3章 朝鮮
太祖の漢陽遷都と宗廟・宮殿及び城郭の造営」六八頁、同
「第I編第5章 太宗の造営活動」一〇六頁。
- (27) 「移御于東宮、東宮移居上林園」(『世宗実録』卷四三、一
一年正月甲子(二七日)条)。當時の東宮に關しては『世宗実録』
卷一四八、地理志、京都漢城府条に「東宮(在建春門之内)」
とある。
- (28) 蜥蜴祈雨の方法は平木實『朝鮮社会文化史研究Ⅱ』(阿
吡社、二〇〇一年二月)「二、朝鮮時代中宗・明宗代の
旱魃を巡る天譴意識とその社会」(初出は『朝鮮学報』第
一三四輯、一九九四年一月)六三頁、参照。
- (29) 『太宗実録』卷二六、一三年七月己卯(二日)条。
- (30) 『太宗実録』卷二六、一三年七月辛巳(四日)条。
- (31) 「孝寧大君補病劇、命設祈禱精勤于上林園」(『世宗実録』
卷八二、二〇年七月甲申(二日)条)。
- (32) 『世宗実録』卷八二、二〇年九月丙戌(五日)条。
- (33) 田川孝三、前掲書「第二編第一章 進上の種類と内容」
二一七頁。
- (34) 「南蕃瓜蛙マヤ国使陳彦祥、至全羅道群山島、為倭所掠、船中
所載火雞・孔雀・鸚鵡・鸚哥、沈香・龍腦・胡椒・蘇木・
香等、諸般藥材・蕃布盡被劫奪、被虜者六十人、戰死者
二十一人、唯男婦共四十人脫死上岸、彦祥嘗於甲戌年(＝
太祖三年、一三九四)、奉使來聘国朝、拜朝奉大夫(＝從
四品)書雲副正者也」(『太宗実録』卷一二、六年八月丁酉
(二日)条)。この略奪事件については田村洋幸『中世日
朝貿易の研究』(三和書房、一九六七年九月)「本論第一章
対馬島の対鮮貿易」一七九頁、田中健夫『東アジア通交
圈と國際認識』(吉川弘文館、一九九七年二月)「第一 倭
寇と東アジア通交圈」(初出は朝尾直弘他編『日本の社会
史(1)列島内外の交通と国家』岩波書店、一九八七年一
月)二〇頁に指摘があり、対馬宗氏のクジャク献上は國原
美佐子「十五世紀の日朝間で授受した禽獸」(『史論(京都
女子大学史学研究室)』第五四集、二〇〇一年三月)一三

- ・一三二頁でも取りあげられた。
- (35) ただし、この措置は例外であった。のち宣祖三二年（一五八九）に対馬島主はクジャク二双を献じたが、飼育が困難として京畿南陽の絶島に放っている。『宣祖実録』巻二三、三二年七月丁巳（二二日）・八月朔丙子・二月甲午（二二日）条。
- (36) 「遣司鑰（＝掖庭署の雑職で、宮門と闕内諸門の施錠を担当した正・従六品職）姜義于江原道、求好梨枝、以接上林園木也」（『太宗実録』巻二三、一二年二月癸酉（一八日）条）。「遣上林園別監（＝上林園の雑職）金用于济州、移栽柑橘数百株于順天等沿海郡」（同書巻二四、一二年一月壬寅（二二日）条）。
- (37) 「対馬島宗貞盛遣也老仇、献木芙蓉三株・楊梅木株、命植于上林園」（『世宗実録』巻一六、二九年五月己酉（一九日）条）。
- (38) 「平安道捕黑狐以進、命上林園養之」（『世宗実録』巻三九、一〇年三月壬辰（二〇日）条）。
- (39) 「济州按撫使崔海山、進石榴六顆同帶者、其辞曰、嘉禾之瑞、奚独專美、臣心竊謂聖上賑活人命、仁恩博洽、天地感応之致、上命下上林園」（『世宗実録』巻六九、一七年九月己丑（二二日）条）。全羅道济州の按撫使は世祖一二年（一四六六）に兵馬水軍節度使となり、ついで牧使に改称される正三品の守令である（『新增東国輿地勝覧』巻三八、全羅道济州牧、建置沿革条）。
- (40) 「济州按撫使崔海山進獐子・獐牝牡、命養于上林園、其後、移放仁川龍流島」（『世宗実録』巻七三、一八年閏六月庚辰（二六日）条）。
- (41) 「諭咸吉道都觀察使曰、上林園啓、今歲本園梨樹專不結実、難以供薦新・進上及大小祭享、道内官家有結実処、随宜備進、勿強索民間、（後略）」（『世宗実録』巻八、元年七月乙丑（二九日）条）。この記録自体は田川孝三、前掲書「第二編第一章 進上の種類と内容」二二三頁に引用された。
- (42) 鄭在鍾「昌德宮後苑에 對하여」（『考古美術—樹默泰弘燮博士華甲紀念論文集』第一三六・一三七号、ソウル、一九七八年三月）二〇三頁。
- (43) 洪順敏「창덕궁과 후원」（『한국사 시민강좌』第二三集、ソウル、一九九八年八月）八九〜九〇頁。
- (44) 洪順敏、前掲書「二、조선전기 궁궐창건과 法宮—離宮兩闕体制의 확립」三九頁。
- (45) 諸橋轍次『大漢和辞典』（大修館書店、一九九〇年一〇月修訂第二版第六刷）巻一〇、三六二頁。檀国大学校附設東洋学研究所編『漢韓大辞典』巻一二（檀国大学校出版部、龍仁、二〇〇七年二月）六五六頁。
- (46) 張志連「麗末鮮初遷都論議에 대하여」（『韓國史論』四三集、ソウル、二〇〇〇年六月）三五〜三六頁。
- (47) 「宴宗親于解愠亭」（『太宗実録』巻一二、六年七月丁酉（一〇日）条）。「宴宗親于解愠亭」（同書巻一三、七年正月丙寅（二一日）条）。
- (48) 「御解愠亭、召成均大司成柳伯淳、講易・春秋」（『太宗実録』巻一三、七年五月辛酉（八日）条）。「御解愠亭、觀擊毬」（同

- 書卷一四、七年八月己亥（二八日）条。
- (49) 「上御解愠亭、觀放火車、（中略）火車之制、以鉄翎箭數十納諸銅桶、載於小車、以火葉發之、猛烈可以制敵」（『太宗実録』卷一八、九年一〇月丙辰（二八日）条）。「觀灯于解愠亭、明日亦如之、分左右立柱張灯、令内資・内贍弁之」（同書卷二三、一二年四月壬戌（八日）条）。
- (50) 「故於丁亥（太宗七年）之早、命昌寧府院君成石璘祭于北郊、予於解愠亭前、終夜跪禱」（『太宗実録』卷三四、一七年一二月乙酉（四日）条）。また桑野榮治「高麗から李朝初期における円丘壇祭祀の受容と変容―祈雨祭としての機能を中心に」（『朝鮮学報』第一六一輯、一九九六年一〇月一八・四一頁、参照）。
- (51) 広延楼は太宗六年四月に完成した昌德宮内の楼亭であり（『太宗実録』卷一一、六年四月辛酉朔条）、『新增東国輿地勝覧』卷一、京都上、宮闕条、昌德宮の項に「東宮（在建陽門（昌德宮仁政殿の東門）外、旧求賢堂・広延亭之基、前有蓮池、成化二十二年（成宗一七年、一四八六）建、改称春宮」とみえたとおり、のちここには東宮が建設される。
- (52) 「本宮池魚、皆自死浮水、命移広延楼・解愠亭前池之魚、放于慶会楼下大池、恐又以水浅自死也」（『太宗実録』卷二五、一三年四月庚申（二二日）条）。
- (53) 「（恭讓王）四年六月己卯、鵠鷗鳴於解愠亭、是月、群鳥集于演福寺及花園・白鹿山、其飛蔽天」（『高麗史』卷五三、五行志一）。
- (54) 「宮闕志」昌慶宮、慎独齋条に「慎独齋在蘭香閣北、即東宮書堂」、また同書昌慶宮、解愠楼条に「解愠楼在慎独齋北、初無名、肅宗朝命名」とあり、昌德宮に隣接する昌慶宮に慎独齋と解愠楼の存在を確認できる。とはいえ、朝鮮初期の解愠亭（慎独亭）との関係は判然としない。
- (55) 池斗煥『朝鮮前期儀礼研究―性理学正統論を中心として』（ソウル大学校出版部、ソウル、一九九四年七月）「第2章第1節 原廟制度の整備」（初出は『韓國文化』4、ソウル、一九八三年一二月）八七～九五頁。韓亨周『朝鮮初期国家祭祀研究』（一潮閣、ソウル、二〇〇二年四月）「제3장 宗廟祭祀의 성립과 그 성격」（初出は『明知史論』第一一・一二合輯、ソウル、二〇〇〇年一月）一〇五～一一〇頁。李賢珍「조선왕실의忌晨祭실행과 변천」（『朝鮮時代史学報』四六、ソウル、二〇〇八年九月）九六～九八頁。
- (56) 桑野榮治「朝鮮初期の対明遥拝儀礼―その概念の成立過程を中心に」（『久留米大学比較文化年報』第一〇輯、二〇〇一年三月。のち同『高麗末期から李朝初期における対明外交儀礼の基礎的研究』二〇〇一～二〇〇三年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書、二〇〇四年二月に再録）一〇九～一一〇頁。
- (57) 山内弘一「北宋時代の神御殿と景靈宮」（『東方学』第七〇輯、一九八五年七月）五一～五五頁。
- (58) 『太宗実録』卷一五、七年十一月癸未（二一日）・一二月丁卯（二五日）条。

- (59) 『世宗実録』卷八、二年七月癸未（一七日）条。池斗煥、前掲書「第2章第1節 原廟制度의 整備」九一頁。
- (60) 「議政府・六曹相視魂殿之基于德盛坊」（『世宗実録』卷八、二年七月壬辰（二六日）条。「号魂殿曰広孝」（同書卷九、二年九月甲戌（九日）条）。
- (61) 『世宗実録』卷一四八、地理志、京都漢城府条、東部凡十二坊の項。『新增東國輿地勝覽』卷二、京都下、文職公署条、東部の項。ただし、徳成坊は朝鮮後期の英祖代（一二二四〜七六年）までには廃止されたとみなされている。漢城府の五部四九坊制については元永煥『朝鮮時代漢城府研究』（江原大学校出版部、春川、一九九〇年一月）「第2章 漢城府行政体制と管轄区域」（初出は『郷土서울』第三九号、ソウル、一九八一年十二月）四六〜四七頁、参照。
- (62) 「下書承政院、其書曰、（中略）初、文昭殿在昌德宮重牆之外、殿之牆東有一仏堂、七僧守之、與開慶・衍慶・崇孝同一義也、癸丑年移安之時、因而破壞、至今未復、（中略）今欲於文昭殿西北空地、營構一堂、七僧守之、其制度正堂一間、東西廊各三間、門三間、厨三間、止此而已、近日以此意語兩議政、皆曰不可、而在宮城之内、尤以為不可、（中略）仍教曰、予意止此、更不他言、亦論於政府、都承旨李思哲・右承旨李宜治・左副承旨安完慶・右副承旨李師純・同副承旨李季甸等同辭以啓曰、禁内設仏堂、固不可也、且文昭殿清齋之所、使僧徒處於其傍、尤為不可、（中略）且其出入、必由孝先門、異服之人、由孝先門出入禁中、於觀聽何如、願停此舉、上曰、予何言哉、若一一答之、則人君至於多言、可乎、思哲等請至再、不允」（『世宗実録』卷一二一、三〇年七月辛丑（一七日）条。ソウル特別市史編纂委員會編、前掲『서울特別市史』「第一部第二章第一節Ⅲ 秘苑」二八八頁では傍線部に注目し、宮闕内殿の後方に後苑と境界を分ける牆垣があり、さらにその外方に後苑を圍繞する「重牆」があつて、その重牆外に文昭殿と仏堂が存在したと推測する。
- (63) 「（前略）議政府左參贊鄭某將僉議來啓、亦言仏堂之非、且曰、上教以在重牆之外為辭、然昌德宮之文昭殿、本非闕内重牆之外也、在近闕之處、欲禁外人通行、故築垣牆以連於闕耳、且隔一丘山、不得通望禁中、此則不然、俯視宮禁、不可置寺、上曰、以禁内立仏堂為非、則然矣、何其曲為巧辭以啓乎、思哲等又進月華門（勤政殿西門）内、請之再三、不許、（後略）」（『世宗実録』卷一二一、三〇年七月壬寅（二八日）条）。
- (64) ただし、後代の『増補文獻備考』（純宗二年、一九〇八）卷六〇、礼考七、補、魂殿、文昭殿条に「文昭殿在城内」とあることから、文昭殿は闕外つまり昌德宮外にあったと考えられる論者もいる。たとえば、李賢珍「조선왕실의 혼전」（鄭玉子他『조선시대 문화사（상）—문물의 정비와 왕실문화』一志社、ソウル、二〇〇七年十二月）一五一〜一五二頁、参照。
- (65) 「右議政尹仁鏡等議啓曰、（中略）且以魂殿前例書啓曰、太宗昇遐時魂殿、乃広孝殿、似在闕外、而無以思政殿為魂殿前例、（後略）」（『中宗実録』卷一〇五、三九年二月丁亥（二三日）条）。

- (66) 『太宗実録』卷一五、八年五月壬申(二四日)条。同書卷一六、八年九月甲寅(九日)条。
- (67) 『太宗実録』卷一六、八年八月辛丑(二六日)条。
- (68) 『太宗実録』卷一六、八年一〇月乙亥朔条。
- (69) 『太宗実録』卷二〇、一〇年七月辛卯(二六日・甲午(二九日)条。
- (70) 「礼曹啓、文昭殿兩位、広孝殿兩位、請移安于新建原廟、仍号為文昭殿、從之」(『世宗実録』卷五三、一四年一〇月甲寅(二九日)条)。「移安太祖・太宗神位版于新文昭殿、上率文武群臣、親行安神祭如儀、還宮、知申事安崇善等行賀礼」(同書卷六〇、一五年五月乙卯(三日)条)。
- (71) 『世宗実録』卷八八、二二年正月辛未(二八日)条。
- (72) 「移御昌德宮、議政府・六曹堂上官問安」(『世祖実録』卷一七、五年九月甲申(五日)条)。「御後苑、分左右鑿池、賜酒肉于役夫、觀放鴉鵲」(同書卷一七、五年九月乙酉(六日)条)。
- (73) 桑野榮治、前掲「朝鮮初期の『禁苑』」三三四頁。
- (74) 史料の制約もあり、閔武亭の沿革はソウル特別市史編纂委員会編、前掲『서울特別市史』「第一部第二章第一節Ⅲ秘苑」一八八〜一八九頁の成果に負うところが大きい。
- (75) 河内良弘『明代女真史の研究』(同朋舎、一九九二年八月)「第Ⅱ部第十三章 趙三波集團」(初出は『朝鮮学報』第七三輯、一九七四年一〇月)四五三〜四五五頁。
- (76) 「御閔武亭、觀射、設酌、(後略)」(『世祖実録』卷二七、八年二月丁丑(二二日)条)。「御閔武亭、觀射」(同書卷四四、一三年一月丁亥(二五日)条)。
- (77) 「伝于繕工監曰、撤閔武亭二間材、加構臨瀛大君亭子」(『世祖実録』卷四六、一四年五月辛巳(二二日)条)。
- (78) 「(前略)移御閔武亭、召新宗君孝伯・堤川君益及兼司僕・宣伝官等、侍射蹲甲(Ⅱ鎧を据えおいてこれを射ること)、独孝伯穿累札、命承政院加階」(『睿宗実録』卷二、即位年一二月甲辰(一八日)条)。
- (79) 「辛閔武亭、仁山君洪允成及承旨・都摠府・兵曹堂上入侍、以武靈君柳子光為中廂大將、辛鏄左廂大將、李鉄堅右廂大將、聚慶尚道徵來軍士、習陣于後苑」(『睿宗実録』卷四、元年閏二月丁巳(二日)条)。
- (80) 桑野榮治、前掲「朝鮮初期の『禁苑』」三三二〜三四〇頁。
- (81) 「建奎章閣于昌德宮禁苑之北、(中略)西南曰奉謨堂(即古閔武亭、載輿地勝覽・宮闕志、因古制不改、但設龜榻分奉)、奉列朝御製・御筆・御画・顧命・遺詔・密教及璫譜・世譜・寶鑑・狀誌、正南曰閔古觀、上下二層、又北折為皆有窩、藏華本・図籍」(『正祖実録』卷二、即位年九月癸巳(二五日)条)。なお、史料中の「閔古觀」は後述する瑞葱臺の跡地に建設された図書館である。文化財庁編、前掲『동원도 일기』「동원도 일기―후원」一三〇頁、同「후원의 조경적 특징」一六〇頁、参照。
- (82) 「王世子嬪有疾、上與中宮・王世子移御昌德宮、(後略)」「上欲増広昌德宮城、命桂陽君璫・鈴川府院君尹師路・左議政申叔舟・中樞院使李純之・戸曹判書曹錫文・行上護軍金漑・漢城府尹黃孝源、審基地、賜酒」(順に『世祖実録』

卷二六、七年一月丁酉朔・庚申（二四日）条。以後、世祖はこゝ昌徳宮で冬を過し、翌年二月下旬に景福宮に戻つてからは晩年まで景福宮にて生活した。洪順敏、前掲書二、조선전기 궁궐창건과 法宮―離宮 兩闕体制의 확립―五三〜五五頁。

(83) 营造尺は山陵の築造、官僚の邸宅の規格、都城の周圍測定など際に使用され、朝鮮前期の营造尺は約三〇、八cmとされる。李宗峯『韓國中世度量衡制研究』（慧眼、ソウル、二〇〇一年十二月）제2장 度制와 基準尺의 변화―一〇一・一一〇頁。

(84) 家舎業務を担当するのは漢城府戸房である。元永煥、前掲書「第3章 漢城府의 機能」（初出は『郷土서울』第三四号、ソウル、一九七六年一月）七七〜八一頁。

(85) 「上與中宮幸昌徳宮、相宮牆広築基址、先是、將広宮牆、撤宮東北洞人家、至是、又撤北帖底人家五十八区、周圍凡四千尺、（中略）盡甃都城坊里人、分統築之、以百十九家為一統、一統所築二十五尺、統凡一百六十、每統皆以秩高人員主之、自今日始役、伝曰、東帖亦是主山來脈、不宜在城外、更広之、於是又退四百尺」（『世祖実録』卷三〇、九年二月丙寅（七日）条）。なお、ソウル特別市史編纂委員会編、前掲『서울特別市史』「第一部第二章第一節Ⅲ 秘苑」一九一頁によれば、史料中の「東帖」（「帖」は朝鮮国字で峠の意）は成均館と境界をなす丘陵と推測されている。

(86) 『世祖実録』卷四二、一三年四月辛丑（六日）・五月甲申（二〇日）条。

(87) ソウル特別市史編纂委員会編、前掲『서울特別市史』「第一部第二章第一節Ⅲ 秘苑」一九〇頁。

(88) ソウル特別市史編纂委員会編、前掲『서울六百年史』「第一章第3節 昌徳宮」七九〜八〇頁。

(89) 世宗六年六月に太宗はこれ以前にも茅亭にて二度視事している。『世宗実録』卷一一、三年六月丙申（五日）・辛丑（二〇日）条。

(90) 『世宗実録』卷一二、三年五月戊辰（七日）・七月丁卯（七日）条。

(91) 「御忠順堂、設酌、（中略）上歩至後苑、使李純之等、相構茅亭之基、遂御翠露亭池辺、命岡・元濬等、講兵書・莊・老子・韓文等書、（後略）」（『世祖実録』卷二三、七年正月壬戌（二一日）条）。この記録の冒頭には「忠順堂に御して酌を設く」とあることから、ここにいる後苑とは昌徳宮ではなく景福宮の後苑を指す。

(92) 「上嘗欲構無逸殿、材已具、重用民力、罷之」（『世祖実録』卷四二、一三年四月辛亥（二六日）条）。

(93) 「罷昌徳宮後苑新殿役」（『世祖実録』卷四七、一四年八月壬子（二五日）条）。

(94) 『世祖実録』卷四七、一四年九月甲子（八日）条。

(95) 洪順敏、前掲書二、조선전기 궁궐창건과 法宮―離宮 兩闕体制의 확립―六三頁。

(96) 『世宗実録』卷一四八、地理志、京都漢城府条には「先蚕壇（在東小門外沙閑伊）」とあり、先蚕壇は嚴密にいえば東小門（恵化門）外の北郊にあつた。朝鮮初期の壇廟につ

いては桑野栄治「朝鮮初期の圜丘壇と北郊壇」（橋本義則編、前掲『東アジア都城の比較研究』、所収）三八六頁の「表4 朝鮮初期漢城の壇廟所在地」に整理した。なお、張志連「조선 후기都城圖를 통해 본壇廟인식」（『朝鮮時代史學報』四五、ソウル、二〇〇八年六月）二八六～二八七頁によれば、国家祭祀体系では中祀に属する先蚕壇は朝鮮後期の古地図に描かれることは少なく、中祀ではもつとも比重が低い祭壇であったという。

(97) 新城理恵「絹と皇后—中国の国家儀礼と養蚕」（網野善彦他編『天皇と王権を考える（3生産と流通）』岩波書店、二〇〇二年一〇月）一五〇～一五一頁。

(98) 「礼曹啓親蚕應行節目、謹稽古制、條錄以聞、（中略）一、宋制、採桑壇方三丈、高五尺四陞、今依此制築壇、（中略）一、通典、皇后享先蚕、礼畢詣採桑壇、宋史、皇后親蚕、命有司享先于本壇、今先蚕壇在北郊、採桑壇在後苑、則親祀為難、依宋制遣官祀先蚕、（後略）」（『成宗実録』卷七一、七年九月乙丑（二十五日）条）。

(99) 朴慶龍『漢城府研究』（国學資料院、ソウル、二〇〇〇年七月）「제3편 제1장 朝鮮前期 서울의 蚕業」（初出は『国史館論叢』第一二輯、果川、一九九〇年七月）二〇一・二二三～二二〇頁。韓亨周、前掲書「제4장 中祀의 성립과 운영」。（初出は『震檀學報』第八九号、ソウル、二〇〇〇年六月）一五八～一五九頁。このほか、ソウル特別市史編纂委員會編、前掲『서울六百年史』第二章第4節「先農壇・先蚕壇」（執筆は李在崑）二二四～二二五頁では『増補文獻備考』のほか『度支志』（一七八八年、筆写本）など後代に編纂された史料に基づいて後苑採桑壇の築造を叙述した。もつとも、すでに京城府編『京城府史』第三卷（京城府、京城、一九四一年三月）「第二章第五章 本庁区域内に編入せられた北部諸町の古態」九三五～九三八頁では朝鮮時代の親蚕儀礼を概観していた。

(100) 『成宗実録』卷七八、八年三月庚午（三日）条。

(101) 韓亨周、前掲書「제4장 中祀의 성립과 운영」一五九頁に成宗八年三月以後、「成宗代に王妃が親蚕した事例はみえない」というのは誤解である。

(102) 『成宗実録』卷二七五、二四年三月乙亥（一〇日）条。成宗代における先農親祭は成宗六年正月、同一九年閏正月とあわせて計三回実施された。この点は韓亨周、前掲書「제4장 中祀의 성립과 운영」一五三～一五五頁、参照。

(103) 京城府編、前掲『京城府史』第一卷「第二編第一章 李朝国初に於ける首府京城の建設」六四～七三頁。ソウル特別市史編纂委員會編、前掲『서울特別市史』「第一部第二章 第一節IV 昌慶宮」二二三～二二六頁。同委員會編、前掲『서울六百年史』「第一章第4節 昌慶宮」（執筆は金東賢）九五～九八頁。洪順敏、前掲書「二、조선전기 궁궐창건과 法宮—離宮 兩闕体制의 확립」五九～六一頁。

(104) 「上於昌慶宮通明殿北構一亭、親命名曰環翠、令左副承旨金宗直製記以進」（『成宗実録』卷一六八、一五年七月己丑〔五日〕条）。この記録は断片的ながら京城府編、前掲『京城府史』第一卷「第二編第一章 李朝国初に於ける首府京

城の建設」六五頁に引用された。また洪順敏、前掲「창덕궁과 후원」二七八頁に指摘されたように、金宗直（一四三一〜九二年）の遺稿集『佔畢齋文集』（『標点影印 韓国文集叢刊』一二、民族文化推進会、ソウル、一九八八年）二月影印、所収。底本はソウル大学校奎章閣蔵本）巻二に「環翠亭記」を収録する。

- (105) ソウル特別市史編纂委員会編、前掲『서울六百年史』「第一章第4節 昌慶宮」九七頁。

- (106) その後は、たとえば明宗十二年（一五五七）二月に明宗は環翠亭に出御して成均館の儒生七人を引見し、講書（経書の試験）を実施したことがある。『明宗実録』巻二二、一二年二月丙午（二二日）条。

- (107) 投壺が朝鮮初期、とりわけ成宗代に盛んに催されたことは平木實『韓国・朝鮮社会文化史と東アジア』（学術出版会、二〇一一年一〇月）「第三章 朝鮮時代初期における王位継承争いと『投壺』儀礼」（初出は『立命館史学』第六一九号、二〇一〇年一二月）に詳しい。

- (108) 洪順敏、前掲書「二、조선전기 궁궐창건과 法宮―離宮兩闕体制의 화림」六四頁。

- (109) 須川英徳「背徳の王燕山君―儒教への反逆者」（『アジア遊学』第五〇号、二〇〇三年四月）六七〜六八頁。また洪順敏、前掲書「二、조선전기 궁궐창건과 法宮―離宮兩闕体制의 화림」六四〜六六頁、金範「朝鮮燕山君代의 王權과 政局運営」（『大東文化研究』第五三輯、ソウル、二〇〇六年三月）二七七〜二七八頁も燕山君による恣意的王権行使の事

例として、当時の宮闕補修事業と民家の撤去に注目した。

- (110) 「伝曰、宮城底民居、已令撤去、今成均館西泮水及浄業院（昌徳宮後苑の西側にあった尼寺）東辺宮城近処、居民頗多、今者日氣向和、宜速撤去、且大成殿北、地形稍高、傍岸居民、並令定限撤去、若限内不撤者、不能檢挙官吏、並治其罪」（『燕山君日記』卷四二、八年二月己未（二六日）条）。

- (111) 「伝曰、景福宮・昌徳宮内牆、皆令高築、外間不肖之人、必以為高其垣牆、使不得窺内也、予非為此、前有潜踰者故耳」（『燕山君日記』卷四八、九年二月乙巳（八日）条）。

- (112) 「伝曰、宮牆外附近人家、西自浄業院、東自成均館以下、應撤去家舍、磨練以啓」（『燕山君日記』卷五一、九年一月丁卯（四日）条）。「伝曰、昌徳宮後苑東墻底金綴文等十四人家及警守所（巡邏軍の夜警所）一、西墻底長命等六十二人家及警守所四、含春苑南墻外韓繼善等十四人家、今月二十日内撤去」（同書卷五一、九年一月戊辰（五日）条）。

- (113) 「御経筵（中略）伝曰、宮墻低卑、実為不可、近者鷹師犯罪、踰垣而走、先王朝亦有盗入信敬堂近地、如此等事、夫豈美哉、若地勢卑下、則雖高築、難於障蔽、須嚴備蓋板、待春修築、前者不肖之輩以為、設藩籬、遊宴其中、若欲遊宴、豈必藩籬中耶、此言不足数也、若別築内墻、則功多弊鉅、因旧加築、則力少功倍矣、卿（左議政兼領事李克均）領修理都監事、非但修理景福宮、可兼修昌徳宮」（『燕山君日記』卷五一、九年一月丁卯（四日）条）。

- (114) 「伝曰、闕内臨压及墻底人家、自明日始撤、限晦日畢撤去」

『燕山君日記』卷五一、九年一月庚辰（一七日）条。「伝曰、後苑東牆外人家既撤、軍士等尚在牆底何也、即令黜去」（同書卷五一、九年一月辛卯（二八日）条）。

(115) 「伝曰、梨峴與宣仁門（＝仁政殿の東門）下牆隅、皆作正門及左右狹門、其兩旁作行廊、姜龜孫啓、冬寒不可作門、姑以山臺木植立、困籬何如、伝曰、雖只植木如柵、人豈敢行乎、不必設籬」（『燕山君日記』卷五一、九年一月戊辰（五日）条）。「伝曰、景福宮臨厓処及駝駱山底人家、更審後撤去、姑於梨峴作門、高築宮牆、且空其家、使不得出入、俄而伝曰、勿更審、急速撤去」（同書卷五一、九年一月辛巳（二八日）条）。

(116) ソウル特別市史編纂委員会編、前掲『서울六百年史』「第一章第3節 昌德宮」八〇頁。

(117) 「在敦義門外西北、本慕華樓、世宗十二年、改為館」（『新增東國輿地勝覽』卷三、漢城府、宮室条、慕華館の項）。

(118) のちに燕山君は東小門を閉鎖して「東小門外禁限図」を作成させ、この黄阜より興仁門（俗称、東大門）外の東籍田まで禁標を立てることにより、丘陵地から後苑を覗かせないよう対処している。『燕山君日記』卷五四、一〇年七月丁未（一九日）・辛亥（二三日）条。同書卷五五、一〇年八月辛巳（二四日）条。

(119) ソウル特別市史編纂委員会編、前掲『서울六百年史』「第一章第3節 昌德宮」八〇頁。

(120) 『新增東國輿地勝覽』卷三、漢城府、樓亭条に「七德亭（即漢江之下白沙汀、世祖屢幸閱武、因名焉）」とある。また

『世祖実録』卷三四、一〇年八月辛丑（二〇日）条に「上與中宮幸七德亭」とみえる。

(121) 『新增東國輿地勝覽』卷三、漢城府、樓亭条に「望遠亭（在楊花渡東岸、亭本孝寧大君喜雨亭、成宗甲辰（＝成宗一五年、一四八四）、月山大君改構建今名、每歲省農及觀水戰時、常御此亭）」とある。

(122) 後日、燕山君は「遊觀の地」たる望遠亭（喜雨亭）までの道路を塞ぎ、通行を禁じている（『燕山君日記』卷五五、一〇年八月丙子（一九日）条）。なお、明使が望遠亭など漢江流域にて遊觀していたことは、李相培「조선전기 外国使臣 접대와 明使의 遊觀연구」（曹圭益他編『연행록연구 총서 7（정치・경제・외교）』学古房、ソウル、二〇〇六年九月。初出は『国史館論叢』第一〇四輯、果川、二〇〇四年一〇月）四二六頁、参照。

(123) 「柳洵・姜龜孫啓、命營造処、如遮陽閣・環翠亭及明政殿階下鋪石、水刺間・仁政殿・文昭殿温埃、慕華館閱武亭、黄阜閱武亭・望遠亭、延英門・宣政殿至肅章門築御路、開隱溝、（中略）何処先構、伝曰、先作仁陽殿」（『燕山君日記』卷五五、一〇年八月乙酉（二八日）条）。

(124) 「命作望遠亭、亭在楊花渡東、乃月山大君別野、至是撤而改構、蓋以白草、可坐数千人、登亭望見処、無問公私家並撤、自楊花至麻浦、盡為丘墟」（伝曰、望遠亭以秀麗亭称号）「命改造秀麗亭」（順に『燕山君日記』卷六三、一二年八月己酉（二日）・戊午（二一日）・癸亥（二六日）条。その後、中宗代以降の実録記事には秀麗亭に関する記録はなく、哲宗

一二年（一八六一）に製作された金正浩『大東輿地図』（京城帝国大学法文学部、京城、一九三六年三月影印。復刻は吉田光男監修、草風館、一九九四年九月）京兆五部では漢江楊花鎮のすぐ上に「望遠亭」とある。

- (125) 「上以小駕儀仗、発景福宮、出崇礼門到七德亭、觀武才、放火炮〔在都城南五里許、沙場広闊之中、有一丘隴平行、遠臨江水、眼界洞豁、真形勝地也、中廟常幸于此、以試武才〕、（後略）」（『明宗実録』卷二九、一八年九月辛卯〔一六日〕条。

- (126) 『燕山君日記』卷五四、一〇年七月戊戌（二〇日）・己亥（二一日）・庚子（二二日）条。太平館については『新增東国輿地勝覽』卷三、漢城府、宮室条、太平館の項に「在崇礼門内、待中朝使臣、館後有樓」とある。

- (127) 『燕山君日記』卷五五、一〇年八月戊辰（二一日）条。燕山君代の駅制の崩壊は村井章介『中世倭人伝』（岩波書店、一九九三年三月）Ⅱ『三浦』―異国のなかの中世―一二〇〜一二二頁に言及がある。

- (128) 桑野栄治「正朝・冬至の宮中儀礼を通してみた一五世紀朝鮮の儒教と国家―朝鮮燕山君代の対明遥拝儀礼を中心に」（『朝鮮史研究会論文集』第四三集、二〇〇五年一〇月）四四〜四六頁。

- (129) ソウル特別市史編纂委員会編、前掲『서울特別市史』「第一部第二章第一節Ⅲ 秘苑」一九二頁。同委員会編、前掲『서울六百年史』「第一章第3節 昌徳宮」八一頁、同「第一章第4節 昌慶宮」九七〜九八頁。ただし、後者の『서울六百年史』

『서울六百年史』九七頁では「瑞葱臺は『新增東国輿地勝覽』に、玉流川の南側にある、という」と叙述するが、そうした記録はない。

- (130) 尹張燮（尹張燮・柳沢俊彦共訳）『韓国建築史』（丸善、一九九七年九月）「第四部第二章 朝鮮庭園計画」二二八頁。
(131) 「伝曰、築後苑新臺、如慶会楼」（『燕山君日記』卷五八、一一年五月辛卯〔七日〕条）。

- (132) 「伝曰、瑞葱臺赴役軍、加数抄定、令刑曹正郎李世萱、繕工監奉事辺成監督」（『燕山君日記』卷五八、一一年六月己卯〔二六日〕条）。

- (133) 「伝曰、鑿瑞葱臺前池、深至十身長、令可運大船」（『燕山君日記』卷六一、一二年二月癸亥〔二三日〕条）。

- (134) 須川英徳、前掲「背徳の王燕山君」七三頁。

- (135) 「閔古觀、即瑞葱臺旧址、瑞葱臺古試射之所、至今幸行、前後行内試射、称以瑞葱臺蓋襲旧也」（『宮闕志』昌徳宮、閔古觀条）。

- (136) 「今上（中宗）即位于景福宮、王廢遷于喬桐峯、（中略）在昌徳宮後苑曰瑞葱臺、高数十丈、広袤称是、鑿大池其下、経年工未訖就」（『燕山君日記』卷六三、一二年九月己卯〔二日〕条）。

- (137) 「命撤陽華門及瑞葱臺、皆廢主所建築也」（『中宗実録』卷二、二二年閏正月己酉〔五日〕条）。

- (138) 「上御瑞葱臺、親試儒生製述」（『明宗実録』卷二六、一五年八月己未〔二六日〕条）。「上行曲宴于瑞葱臺、（後略）」（同書卷二六、一五年九月壬午〔二九日〕条）。その後、宣

祖代（一五六七～一六〇八年）にも瑞葱臺は武臣の觀射や儒生の庭試の会場として利用されており、瑞葱臺は壬辰倭乱まで存続したと思われる。『宣祖実録』卷一七、一六年九月甲午（六日）条。同書卷一八、一七年三月庚寅（二三日）壬寅（二五日）条。

(139)

朴廷蕙 『조선시대 궁중기록화 연구』（一志社、ソウル、二〇〇〇年四月）「IV 18 세기 이전의 궁중행사도」一〇四～一〇六・一二九頁。また洪暹 『忍齋先生文集』（『韓國文集叢刊』三二、所収。底本はソウル大学校奎章閣藏本）卷四、雜著、瑞葱臺引見図序。